

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

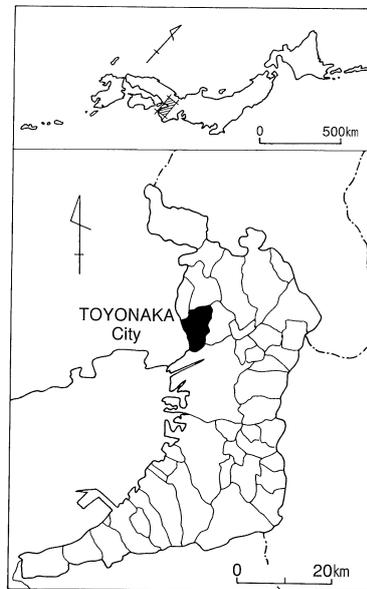
平成16年度(2004年度)

平成17年(2005年)3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 16 年度 (2004年度)



平成 17 年 (2005年) 3 月

豊中市教育委員会



## 序 文

豊中市では、太古から人びとの生活の場が生まれ、数多くの歴史的遺産が現在に受け継がれてきました。それは市域の西部を流れる猪名川や南部の神崎川などを通じて瀬戸内海、大阪湾からもたらされる水産資源と、市域北部の千里丘陵に広がる森林資源など、生活の土台となる豊かな環境が整っていたことの証しでもあります。しかし時代が下り、比較的早くから大阪市内などとの交通路が整備されるにつれて、都市近郊のベッドタウンとしての開発が急激に進んだ結果、埋蔵文化財の保護についても早急に対処する必要に迫られるようになりました。現在では、大規模開発こそ減少しましたが、逆に個人住宅の建築など小規模開発が急増し、埋蔵文化財の保護について従来とは異なる意味で、より迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書は、平成16年度に調査を実施した新免遺跡、上津島遺跡および各遺跡における確認調査に加え、平成15年度後期に調査を実施した原田遺跡、新免遺跡および各遺跡における確認調査の成果の一部も合わせて掲載しました。そのうち、原田遺跡では原田城北城の主郭部分西側の土塁について、はじめてその規模や範囲を確認し、原田城北城の構造に関する新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成 17年 (2005年) 3月31日

豊中市教育委員会  
教育長 浅利 敬一郎

## 例 言

1. 本書は、平成16年度国庫補助事業（総額6,200,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成15年度国庫補助事業として実施した原田遺跡第6次調査、新免遺跡第59次調査の成果を併せて収録するものである。
2. 平成16年度事業として、平成16年4月1日から平成17年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会地域教育振興課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げるとおりである。
4. 本書の作成にあたり、各章の執筆は各調査担当者が実施した。また、第Ⅵ章は各調査担当者の見解をもとに、浅田尚子が執筆した。なお、全体の編集を清水が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、略北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則的に1：4とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成15年度（平成15年10月以降）発掘調査一覧

遺跡名	回数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
原田遺跡	第6次	曾根西町4丁目21-2他	56m <sup>2</sup>	橋田正徳	2004年2月23日 ～3月24日
新免遺跡	第59次	玉井町1丁目247-2	114.92m <sup>2</sup>	清水 篤	2004年3月3日 ～3月24日

平成16年度発掘調査一覧

遺跡名	回数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
上津島遺跡	第7次	上津島2丁目123-17	56.88m <sup>2</sup>	陣内高志	2004年4月21日 ～5月28日
新免遺跡	第60次	玉井町2丁目196-2	108m <sup>2</sup>	陣内高志	2004年8月30日 ～9月24日

# 目 次

第 I 章 位置と環境	(清水)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第 II 章 原田遺跡第 6 次調査	(橘田)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の成果	6
3. まとめ	6
第 III 章 新免遺跡第 59 次調査	(清水)
1. 調査の経緯	9
2. 調査の成果	
(1) 地質環境	9
(2) 検出した遺構と遺物	10
3. まとめ	12
第 IV 章 上津島遺跡第 7 次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	13
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	13
(2) 検出した遺構と遺物	15
3. まとめ	21
第 V 章 新免遺跡第 60 次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	23
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	23
(2) 検出した遺構と遺物	25
3. まとめ	37
第 VI 章 確認調査の成果	39

# 挿 図 ・ 表 目 次

(第I章)		
第1図	市内遺跡分布図 (1:50,000)	2
第2図	調査地点と周辺の地形 (1:50,000)	4
(第II章)		
第3図	調査地位置図 (1:5,000)	5
第4図	トレンチ平面・断面図1 (1:80)	7
第5図	トレンチ平面・断面図2 (1:80)	8
(第III章)		
第6図	調査範囲図 (1:250)	9
第7図	調査地位置図 (1:5,000)	9
第8図	検出遺構平面・断面図 (1:80)	11
第9図	出土遺物 (1:4)	12
(第IV章)		
第10図	調査範囲図 (1:300)	13
第11図	調査地位置図 (1:5,000)	13
第12図	調査区平面・断面図 (1:80)	14
第13図	第一面平面図 (1:80)	16
第14図	溝1平面・断面図 (1:40)	17
第15図	掘立柱建物1平面・断面図 (1:40)	18
第16図	各遺構出土遺物 (1:4)	19
第17図	包含層出土遺物 (1:4)	20
(第V章)		
第18図	調査範囲図 (1:200)	23
第19図	調査地位置図 (1:5,000)	23
第20図	調査区平面・断面図 (1:80)	24
第21図	竪穴住居1平面・断面図 (1:40)	25
第22図	竪穴住居1出土遺物 (1:4)	25
第23図	溝3出土遺物 (1:4)	27
第24図	溝4・溝7出土遺物 (1:4)	27
第25図	土坑1遺物出土状況図 (1:30)	28
第26図	土坑1出土遺物(その1) (1:4)	30
第27図	土坑1出土遺物(その2) (1:4)	31
第28図	土坑1出土遺物(その3) (1:4)	33
第29図	土坑1出土遺物(その4) (1:4)	34
第30図	土坑2遺物出土状況(東から)	34
第31図	土坑2出土遺物 (1:4)	34
第32図	土坑3出土遺物 (1:4)	35
第33図	土坑12出土遺物 (1:4)	36
第34図	土坑14遺物出土状況(東から)	36
第35図	包含層出土遺物 (1:4)	36
(第VI章)		
第1表	確認調査一覧	39
第36図	調査地点位置図 (1:50,000)	41
第37図	トレンチ掘削状況	42
第38図	トレンチ断面図	42
第39図	トレンチ掘削状況	42
第40図	トレンチ断面図	42
第41図	トレンチ掘削状況	43

第42図	トレンチ断面図	43
第43図	トレンチ掘削状況	43
第44図	トレンチ断面図	43
第45図	トレンチ掘削状況	44
第46図	トレンチ平面・断面図	44
第47図	トレンチ掘削状況	44
第48図	トレンチ断面図	44
第49図	トレンチ掘削状況	45
第50図	トレンチ平面・断面図	45
第51図	トレンチ掘削状況	45
第52図	トレンチ断面図	45
第53図	トレンチ掘削状況	46
第54図	トレンチ断面図	46
第55図	トレンチ掘削状況	46
第56図	トレンチ断面図	46
第57図	トレンチ掘削状況	47
第58図	トレンチ断面図	47
第59図	トレンチ掘削状況	47
第60図	トレンチ断面図	47
第61図	トレンチ掘削状況	48
第62図	トレンチ断面図	48
第63図	トレンチ掘削状況	48
第64図	トレンチ断面図	48
第65図	トレンチ掘削状況	49
第66図	トレンチ断面図	49
第67図	トレンチ掘削状況	49
第68図	トレンチ断面図	49
第69図	トレンチ掘削状況	50
第70図	トレンチ平面・断面図	50
第71図	トレンチ位置図	50
第72図	トレンチ断面図	50
第73図	トレンチ掘削状況	51
第74図	トレンチ断面図	51
第75図	トレンチ掘削状況	51
第76図	トレンチ断面図	51
第77図	トレンチ掘削状況	52
第78図	トレンチ断面図	52
第79図	トレンチ掘削状況	52
第80図	トレンチ平面・断面図	52
第81図	トレンチ掘削状況	53
第82図	トレンチ断面図	53
第83図	トレンチ掘削状況	53
第84図	トレンチ断面図	53
第85図	トレンチ掘削状況	54
第86図	トレンチ断面図	54
第87図	トレンチ掘削状況	54
第88図	トレンチ断面図	54
第89図	トレンチ掘削状況	55
第90図	トレンチ断面図	55
第91図	トレンチ掘削状況	55
第92図	トレンチ断面図	55

第93図	トレンチ掘削状況	56
第94図	トレンチ断面図	56
第95図	トレンチ掘削状況	56
第96図	トレンチ断面図	56
第97図	トレンチ掘削状況	57
第98図	トレンチ断面図	57
第99図	トレンチ掘削状況	57
第100図	トレンチ断面図	57
第101図	トレンチ掘削状況	58
第102図	トレンチ平面・断面図	58
第103図	トレンチ掘削状況	58
第104図	トレンチ断面図	58
第105図	トレンチ掘削状況	59
第106図	トレンチ断面図	59
第107図	トレンチ掘削状況	59
第108図	トレンチ断面図	59
第109図	トレンチ掘削状況	60
第110図	トレンチ平面・断面図	60
第111図	トレンチ掘削状況	60
第112図	トレンチ断面図	60
第113図	トレンチ掘削状況	61
第114図	トレンチ断面図	61
第115図	トレンチ位置図	61
第116図	トレンチ断面図	61
第117図	トレンチ掘削状況	62
第118図	トレンチ断面図	62
第119図	トレンチ掘削状況	62
第120図	トレンチ断面図	62
第121図	トレンチ掘削状況	63
第122図	トレンチ断面図	63
第123図	トレンチ掘削状況	63
第124図	トレンチ断面図	63
第125図	トレンチ掘削状況	64
第126図	トレンチ断面図	64
第127図	トレンチ掘削状況	64
第128図	トレンチ断面図	64
第129図	トレンチ掘削状況	65
第130図	トレンチ断面図	65
第131図	トレンチ掘削状況	65
第132図	トレンチ断面図	65
第133図	トレンチ掘削状況	66
第134図	トレンチ断面図	66
第135図	トレンチ掘削状況	66
第136図	トレンチ断面図	66
第137図	トレンチ掘削状況	67
第138図	トレンチ断面図	67
第139図	トレンチ掘削状況	67
第140図	トレンチ断面図	67

付図 市指定史跡 原田城跡 平面図 (1:200)

## 図 版 目 次

図版 1	原田遺跡第 6 次調査	(1) トレンチ 1 全景 (2) トレンチ 3 全景
図版 2	原田遺跡第 6 次調査	(1) トレンチ 4 全景 (2) トレンチ 5 全景
図版 3	原田遺跡第 6 次調査	(1) トレンチ 7 全景 (2) トレンチ 7 断面
図版 4	新免遺跡第 59 次調査	(1) 調査区東半部全景 (2) 調査区西半部全景
図版 5	新免遺跡第 59 次調査	(1) 調査区南壁断面 (2) SP 4 断面
図版 6	新免遺跡第 59 次調査	(1) SP 6 断面 (2) SP 7 断面
図版 7	新免遺跡第 59 次調査	(1) SP 8 断面 (2) SP 11 断面
図版 8	新免遺跡第 59 次調査	(1) SP 12・13 断面 (2) SP 21 断面
図版 9	新免遺跡第 59 次調査 出土遺物	(1) 杯蓋 (SD 3 出土・第 9 図 2) (2) 杯身 (SP 39 出土・第 9 図 3)
図版 10	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 調査区西半部 (北から) (2) 調査区東半部 (西から)
図版 11	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 溝 1 全景 (北から) (2) 掘立柱建物 1 柱穴 2 (3) 掘立柱建物 1 柱穴 3 (4) 掘立柱建物 1 柱穴 4
図版 12	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 土坑 1 と溝 2 (南から) (2) 土坑 2 (北東から)
図版 13	上津島遺跡第 7 次調査	(1) ピット 1 遺物出土状況 (西から) (2) 柱穴 6 断面 (西から)
図版 14	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 溝 3 断面 (南から) (2) 溝 6 断面 (東から)
図版 15	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 柱穴 7 (南から) (2) ピット 2 断面 (西から)
図版 16	上津島遺跡第 7 次調査	(1) 溝 1 白磁椀出土状況 (2) 溝 8 遺物出土状況 (南から)
図版 17	上津島遺跡第 7 次調査 出土遺物	(1) ピット 1 出土 (第 16 図 6) (2) 包含層出土 (第 17 図 4)
図版 18	上津島遺跡第 7 次調査 出土遺物	(1) 包含層出土 (第 17 図 5) (2) 土坑 1 出土 (第 16 図 12)
図版 19	新免遺跡第 60 次調査	(1) 調査区全景 (北から) (2) 調査区全景 (北東から)

- 図版20 新免遺跡第60次調査 (1) 土坑1 全景(西から)  
(2) 土坑1 遺物出土状況(北から)
- 図版21 新免遺跡第60次調査 (1) 土坑1 遺物出土状況(西から)  
(2) 土坑1 断面(南から)
- 図版22 新免遺跡第60次調査 (1) 竪穴住居1 全景(北から)  
(2) 柱穴9 断面  
(3) 柱穴4 断面
- 図版23 新免遺跡第60次調査 (1) 土坑2 遺物出土状況(北から)  
(2) 溝3 遺物出土状況(北から)
- 図版24 新免遺跡第60次調査 (1) 溝1 断面(南から)  
(2) 溝7 断面(北東から)
- 図版25 新免遺跡第60次調査 (1) 柱穴7 断面(東から)  
(2) 柱穴8 断面(南から)
- 図版26 新免遺跡第60次調査 出土遺物 (1) 土坑1 (第26図5)  
(2) 土坑1 (第26図6)  
(3) 土坑1 (第26図17)  
(4) 土坑1 (第26図24)  
(5) 土坑1 (第26図21)  
(6) 土坑1 (第26図25)  
(7) 土坑1 (第27図28)  
(8) 土坑1 (第27図29)
- 図版27 新免遺跡第60次調査 出土遺物 (1) 土坑1 (第27図32)  
(2) 土坑1 (第27図37)  
(3) 土坑1 (第27図39)  
(4) 土坑1 (第27図43)  
(5) 土坑1 (第27図44)  
(6) 土坑1 (第27図45)  
(7) 土坑1 (第27図46)  
(8) 土坑1 (第27図47)
- 図版28 新免遺跡第60次調査 出土遺物 (1) 土坑1 (第28図49)  
(2) 土坑1 (第28図54)  
(3) 土坑1 (第28図51)  
(4) 土坑1 (第28図55)  
(5) 土坑1 (第28図52)  
(6) 土坑1 (第28図57)
- 図版29 新免遺跡第60次調査 出土遺物 (1) 土坑1 (第29図)  
(2) 土坑1 (第28図58)  
(3) 土坑2 (第31図2)  
(4) 土坑2 (第31図3)  
(5) 溝3 (第23図)

# 第I章 位置と環境

## 1. 地理的環境

豊中市は明治43年の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に、大都市近郊の農村から典型的な衛星住宅都市へと発展し、現在では約37km<sup>2</sup>の市域に約40万人もの市民が生活を営むベッドタウンとなっている。市域は地理的に大阪から西国・北国への玄関口として交通の要衝を占める位置にあり、古くは猪名川や千里川、天竺川など市域を南北に流れる河川や、南部の神崎川が瀬戸内海や淀川河口からの主たる交通路として利用されてきた。また、大坂天神橋を起点として市域を南北に貫く能勢街道（吉野嶺道）など、幹線道路としての陸路も縦横に配され、大阪国際空港や名神高速道路をはじめとする様々な交通機関が整備された現在の豊中市の原型をここに見出すことができる。

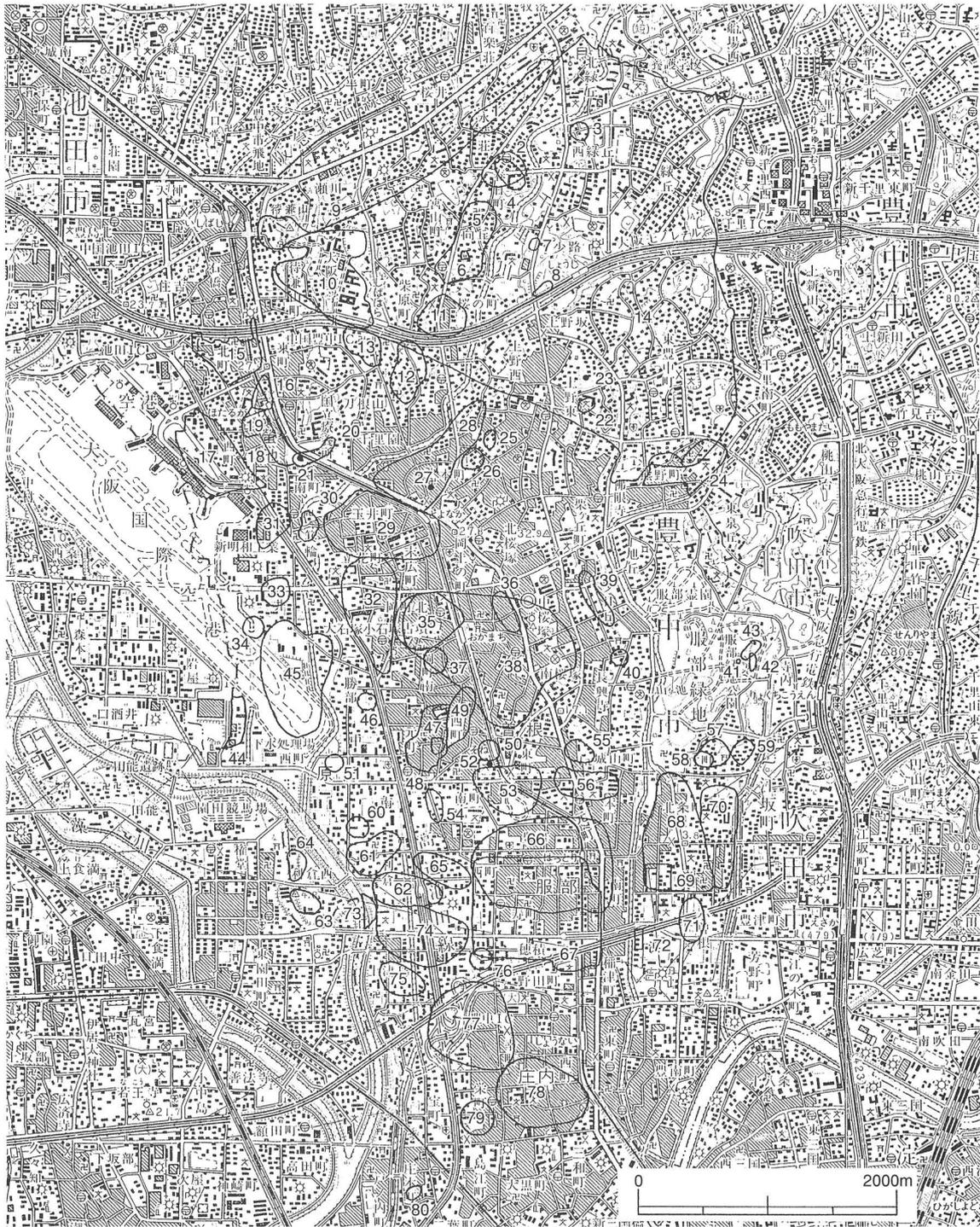
一方、都市化が進む過程で、鉄道や道路、河川に沿って開発が先行した結果、そうした場所から徐々に旧地形が損なわれ、最終的には市域全体に及ぶ開削と埋立によって外見上の地形変化が均されていった。しかしながら、市域で最も標高の高い島熊山付近は海拔100m以上を測り、最も低い大島町付近では海拔1m以下となっていることからわかるように、北から南へあるいは東から西へと傾斜する地形変化を現在でもよく観察することができる。このような地形変化は、巨視的に見れば、箕面以北の丹波山地から断層帯による地溝状の低地をはさみ、その南に広がる千里・刀根山などの丘陵地帯（高～中位段丘）、丘陵に連なる平坦な台地と斜面（中～低位段丘）、そして猪名川の氾濫原、大阪平野へと続く沖積低地に区分される。千里丘陵は大阪層群の模式地として詳細な地質調査がなされ、層群中のMa8（海成粘土層）直下からマチカネワニの全身骨格が出土したことで著名である。

人類の生活痕跡が見出されるのは主として段丘堆積層上であり、千里川上流域の中～低位段丘、台地上に多くの遺跡が分布している。乾燥した台地上から湿潤な沖積低地に本格的に進出するのは弥生終末期以降で、猪名川や天竺川などによって形成された自然堤防上をその生活域とし、河川の埋積作用によって海岸線が後退するにつれてその活動領域を南方へ拡大させていった。やがて古大阪湾が完全に陸化すると、猪名川河口の発達したデルタや複雑に流路が交錯した神崎川河口付近は、中・近世段階の水上交通の要衝として盛んに利用されるようになる。

## 2. 歴史的環境

今回、第IV章で報告する上津島遺跡は、猪名川河口デルタのやや上流左翼側に発達した自然堤防上に立地し、第II章の原田遺跡、第III・V章の新免遺跡は、千里川左岸の中～低位段丘から最低位段丘上に立地する。ここでは、各々の立地する環境・時期に限定して、集落の動向を中心に述べていく。

2. 歴史的環境



- |                        |                |                |                       |              |                       |                       |
|------------------------|----------------|----------------|-----------------------|--------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 太鼓塚古墳群              | 12. 柴原遺跡       | 24. 熊野田遺跡      | 36. 岡町遺跡              | 47. 原田城跡(北城) | 58. 石蓮寺廃寺             | 70. 北条遺跡              |
| 2. 野畑春日町古墳群            | 13. 北刀根山遺跡     | 25. 金寺山廃寺      | 37. 岡町南遺跡             | 原田城跡(南城)     | 59. 寺内遺跡              | 71. 小曾根南遺跡            |
| 3. 野畑遺跡                | 14. 桜井谷齋跡群     | 26. 新免宮山古墳群    | 38. 桜塚古墳群             | 48. 原田遺跡     | 60. 利倉北遺跡             | 72. 上総国飯野藩<br>保科氏浜陣屋跡 |
| 4. 野畑春日町遺跡             | 15. 蛭池北(宮の前)遺跡 | 27. 金寺山廃寺塔刹柱礎石 | 39. 下原齋跡群             | 49. 曾根遺跡     | 61. 利倉遺跡              | 73. 利倉南遺跡             |
| 5. 少路遺跡                | 16. 蛭池東遺跡      | 28. 本町遺跡       | 40. 長興寺遺跡             | 50. 曾根東遺跡    | 62. 利倉西遺跡             | 74. 上津島遺跡             |
| 6. 武藏国岡部藩安部氏<br>桜井谷陣屋跡 | 17. 蛭池西遺跡      | 29. 新免遺跡       | 41. 梅塚古墳              | 51. 原田中町遺跡   | 63. 利倉西遺跡             | 75. 上津島南遺跡            |
| 7. 桜井谷石器散布地            | 18. 蛭池遺跡       | 30. 箕輪東遺跡      | 42. 地輪散布地             | 52. 曾根地輪齋跡   | 64. 熊堂の前遺跡            | 76. 徳積ポンプ場遺跡          |
| 8. 羽鷹下池南遺跡             | 19. 麻田藩陣屋跡     | 31. 箕輪遺跡       | 43. 大坂城鉄砲奉行支配<br>焙硝蔵跡 | 53. 豊島北遺跡    | 65. 服部西遺跡             | 77. 島田遺跡              |
| 9. 待蒙山古墳               | 20. 南刀根山遺跡     | 32. 山ノ上遺跡      | 44. 原田西遺跡             | 54. 曾根南遺跡    | 66. 穂積遺跡              | 78. 庄内遺跡              |
| 10. 待蒙山遺跡              | 21. 御神山古墳      | 33. 勝部北遺跡      | 45. 勝部遺跡              | 55. 城山遺跡     | 67. 穂積村囲堤             | 79. 島江遺跡              |
| 11. 内田遺跡               | 22. 上野遺跡       | 34. 走井遺跡       | 46. 勝部東遺跡             | 56. 服部遺跡     | 68. 小曾根遺跡             | 80. 庄本遺跡              |
|                        | 23. 青池古墳       | 35. 岡町北遺跡      | 46. 勝部東遺跡             | 57. 若竹町遺跡    | 69. 春日大社南郷日代<br>今西氏屋敷 |                       |

第1図 市内遺跡分布図(1:50,000)

**原田・新免遺跡** 勝部遺跡（猪名川・千里川水系）や小曾根遺跡（天竺川水系）などの低湿地に営まれた弥生時代前期の拠点集落では、人口増加など集落が内包する課題を発展的に解消させるため、中期前半になると新たに段丘上へも進出をはかる。新免遺跡はその動向の中で発生した集落として中核的な存在であり、中期の中葉から後半段階に最盛期を迎えた集落である。現在までの調査において、中期段階では大形の円形住居を含む竪穴住居、方形周溝墓が多数検出されていて、墓域はほぼ2か所に集約されることも判明しつつある。新免遺跡では庄内期から布留期にかけて、集落の規模は一旦衰退する。これは庄内期に勝部遺跡や小曾根遺跡で集落が再び活性化し、穂積遺跡、上津島川床遺跡などをはじめとする南部の低湿地で新たな大規模集落が発生すると同時期に見られる現象で、低湿地の乾燥化や河内潟沿岸地域を中心とした流通システムへの移行などがその原因と考えられる。古墳時代後期になると千里川上流に桜井谷窯跡群が形成され、その流通拠点として隣接する本町遺跡とともに新免遺跡の集落は再び活性化する。当該期には掘立柱建物やカマドを伴う方形竪穴住居が遺跡内の各所で検出され、同時に溝や土坑から夥しい焼成不良の須恵器が出土することから、桜井谷から搬出される須恵器を管理し、集荷・選別・出荷の機能を果たしていたものと考えられる。

一方、段丘の末端部に位置する原田遺跡では、弥生時代中期頃に隣接する曾根遺跡から拡大したと考えられる集落が出現し、後期末まで存続するようであるが、その後古代末までの集落の実態は判然としない。ようやく11世紀末になって文献に原田郷に関する記事が登場し、14世紀半ばから在地領主としての原田氏の名が見え始める。その後、15世紀後半には原田氏の居館としての原田城が成立していた状況がうかがえ、近年の発掘調査によって、その成立については北城が遅くとも15世紀代に遡り、南城は16世紀後半、廃絶についてはいずれも16世紀末頃と考えられている。今後の調査の進展によって、原田郷周辺の開発と原田氏、そして南北の原田城の成立～廃絶との関係が明らかになっていくであろう。

**上津島遺跡** 猪名川河口デルタでは、初期の主流路が南東側に振られていたため、現在の猪名川左岸側には巨大な自然堤防が形成された。この自然堤防上に上津島遺跡の集落が営まれている。周辺での拠点的な規模にまで集落が発達するのは、周辺の低湿地集落と同様、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃である。その後、集落は断続的に続くが、古墳時代中期には須恵器を中心とする新技術とその伝達者の受入先としての役割を持っていたとも考えられている。奈良末～平安時代になると猪名川河口域の地理的利点を活かし、近接する上津島南遺跡などとともに港湾都市的な発展を遂げる。官衙風の建物が建ち並び、遺物でも宮都などに匹敵するものが出土することなどを勘案すると、交通の要衝に立地する上津島付近の特殊な環境を見出すことができよう。一方、条里制の施行とともに耕地開発も進展し、11世紀末頃にはある程度整備された条里区画が配置されていたことが発掘調査で明らかになってきている。

2. 歴史的環境



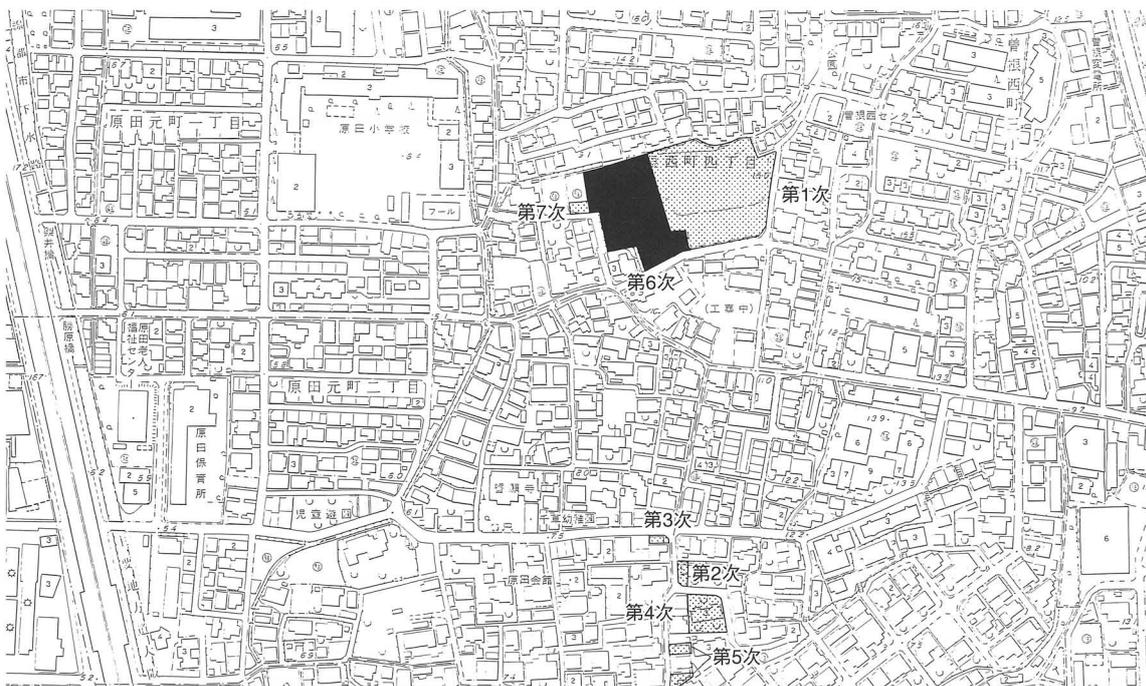
第2図 調査地点と周辺の地形 (1 : 50,000)

## 第Ⅱ章 原田遺跡第6次調査

### 1. 調査の経緯

今回の調査は、昭和62年（1987年）9月1日に豊中市の史跡に指定された、原田城北城（豊中市曾根西町4丁目21-2所在）にかかる範囲確認のために行ったものである。原田城北城は、豊中市曾根西町・原田元町一帯に広がる六車郷（原田郷）の国人である原田氏の居城として、古くから周知された戦国期の城館である。指定地の東隣で行われた原田遺跡第1次調査では、原田城北城の一角となる主郭の一部と幅15mの堀1、幅4m前後の堀2などを検出した。これら調査で検出された遺構などから、当城郭が15世紀頃には築城され、その後荒木村重の乱の際に織田側の陣城として先の堀1が掘削されたことなどが判明した。また、当調査を契機に文献史料などの分析もすすめられる一方で、曾根遺跡第7次調査で外堀の一部が確認され、またそのほかの指定地隣接地における確認調査でも堀1の北辺や南辺が検出され、次第にその全体像が明らかにされるようになってきた。さらに、原田村集落内に立地する原田城南城についても発掘調査により、次第にその実態が把握できるようになり、原田城北城が当地域における国人層の動態を知る上で、不可欠の資料と認識されるようになった。

しかし、このような中で、指定地の売却計画が浮上し、指定地内が開発される危機が生じた。この問題について、史跡の重要性を鑑みた豊中市は公有化を決定し、平成15年（2003年）に公有化をはたした。今回の調査は、公有化をうけて原田城北城主郭範囲の確定、および史跡の現



第3図 調査地位置図（1：5,000）

## 2. 調査の成果

状況を把握するために測量を行い、原田城北城の全体像を分析するための基礎情報を収集することを目的とし、平成16年(2003年)2月23日から3月24日にかけて、56m<sup>2</sup>の範囲を対象に確認調査を行った。

なお、測量作業の成果については、本書末尾の付図を参照していただきたい。

## 2. 調査の成果

今回の調査目的は、原田城北城堀1の範囲の確定をまず第1の目的におき、あわせて土塁と土塁上の建造物の有無の確認を行うために、計5カ所のトレンチを設定した。以下、各トレンチ毎に調査成果を説明する。なお、第2・6トレンチは、期間の都合により調査しなかった。

**第1トレンチ** 主郭南側の堀1と土塁の有無を確認することを目的に、調査区南部において南北方向に設定したトレンチである。宅地造成に伴う盛土を掘削した結果、トレンチ南端付近で堀1北岸の斜面を検出したが、堀基底面までの掘削は極めて危険であるため行わなかった。このため、堀の深さなどは明確ではない。また、トレンチ中央から北側にかけて、幅5m前後の盛土状遺構を確認した。盛土状遺構の北側基底面付近では、斜面堆積が認められることから、土塁の可能性が極めて高いと判断した。

**第3トレンチ** 土塁上に建造物が存在する可能性が考えられた、西辺南端部の現存する土塁の上面に設定したトレンチである。掘削した結果、柱穴などの遺構はなく、建造物は存在しないものと判断した。

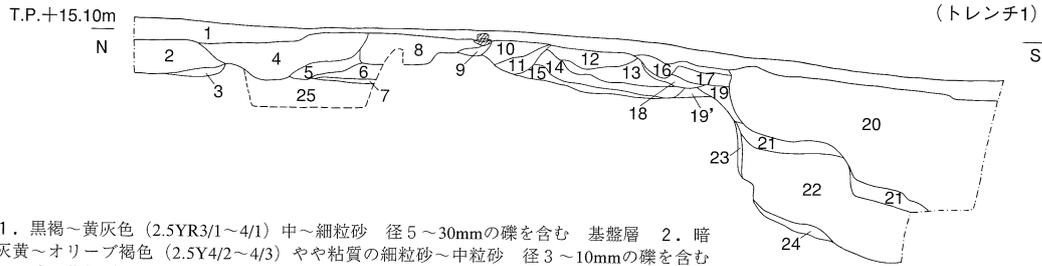
**第4トレンチ** 土塁北辺を確認するために土塁西辺の北端部に設定したトレンチである。調査の結果、トレンチ全域で洪積層粘土は版築された状態で検出した。このことから、丘陵斜面を盛土した上に土塁を構築した可能性が高いことが判明した。なお、土塁北辺の状況は明確にできなかった。

**第5トレンチ** 堀1北西端部を確認するために、設定したトレンチである。検出部分で0.9m前後の堀を確認し、堀1北辺が敷地外に存在することを確定した。

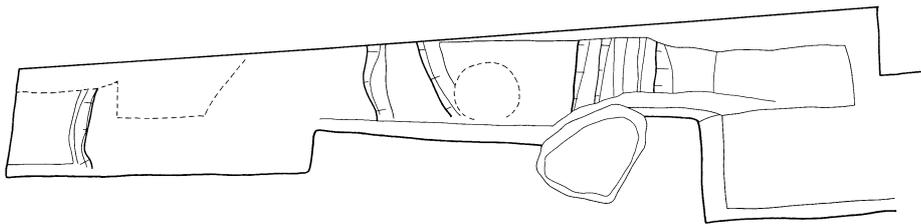
**第7トレンチ** 堀1北辺の確認のために掘削したが、旧地形を確認するにとどまった。堀1の範囲は第5トレンチによるとおりである。

## 3. まとめ

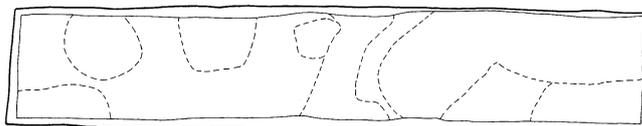
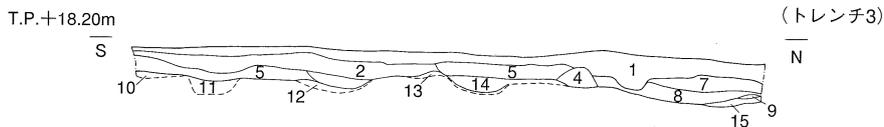
今回の調査では、堀1および土塁の確認を重点的に行ったが、特に北部の状況については明確ではなく、この部分については改めて調査する必要がある。また、主郭内の遺構の残存状況が非常に良好であることが第1トレンチの所見から得られたが、内部の建物などの状況については、面的な調査で十分に確認する必要がある。また出土遺物に13世紀代の遺物もあることから、築城時期を200年以上遡らせる必要がある、今後生じる可能性がある。将来、これら追加調査を行った段階で、原田城北城の成果はより広く公開できるようになるであろう。



1. 黒褐～黄灰色 (2.5YR3/1～4/1) 中～細粒砂 径5～30mmの礫を含む 基盤層 2. 暗灰黄～オリブ褐色 (2.5Y4/2～4/3) やや粘質の細粒砂～中粒砂 径3～10mmの礫を含む 3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2～5/2) (2より粘質の強い) 細粒砂 (～中粒砂) 径3～10mmの礫を含む 4. 黒褐～黄灰色 (2.5Y3/1～4/1) 細粒砂 (～中粒砂) 径5～20mmの礫を含む 径1～2cmの基盤層粘土Bをまばらに含む 攪乱 5. におい黄褐色 (10YR5/4～5/6) 細粒砂 (～中粒砂) 径5～15mmの礫を含む 6. におい黄褐～黄褐色 (10YR5/4～5/6) 細粒砂 径5～10mmの礫を少量含む 7. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 径3～10mmの礫を少量含む 耕作土 8. におい黄褐～黄褐色 (10YR5/4～5/6) 細粒砂 径5～30mmの礫を多く含む 9. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂～中粒砂 10. におい黄褐色 (10YR5/4～5/3) (粘質のある) 中～細粒砂 径5～30mmの礫を含む 11. におい黄褐色 (10YR5/4～5/3) (粘質のある) 中～細粒砂 径5～30mmの礫を多く含む



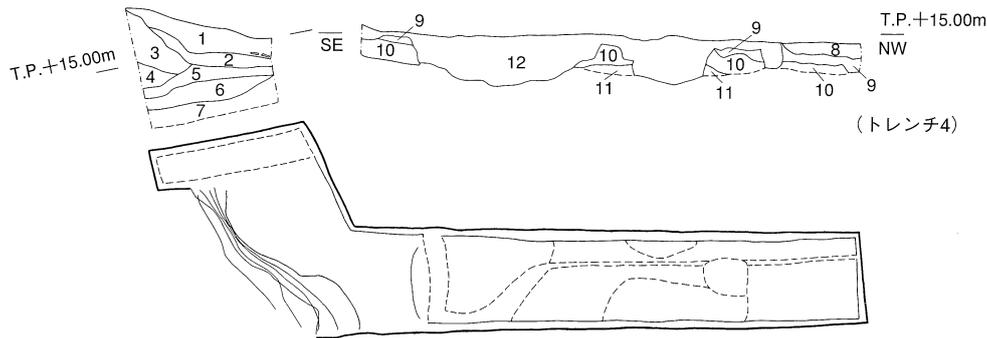
12. におい黄褐色 (10YR5/4～5/3) 細粒砂～中粒砂 径5～30mmの礫を多く含む 13. におい黄褐色 (10YR5/4～5/3) 細～中粒砂 14. におい黄褐色 (10YR4/3) 細～極細粒砂 礫10%・瓦含む 15. におい黄褐色 (10YR4/3) 極～細粒砂 径30mmの礫含む 16. 攪乱 17. におい黄褐色 (10YR4/3) 極細～細粒砂 礫3%含む 18. におい黄褐色 (10YR4/3) 細～極細粒砂 径30mmまでの礫10%含む 19. におい黄褐色 (10YR4/3) 極～細粒砂 径30mmの礫を含む 19'. におい黄褐色 (10YR4/3) 極～細粒砂 径20mmの礫5%含む 20. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂 20～200mmの基盤層塊30%含む 20が混入 21. 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂 礫20%含む 22. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂 20～200mmの基盤層塊30%含む 23. 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 礫40%含む 24. 23と同じ



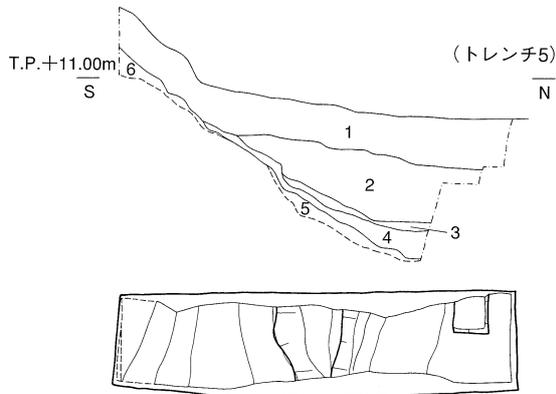
1. におい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 径1～2mmの礫を多く含む 木の根多く含む 表土 2. 褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂 径1cm程度の礫を多く含む 木の根を多く含む 3. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 径1cm程度の礫を少量含む 木の根を多く含む 4. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径1cm程度の礫を微量に含む 径1～3cmの明赤褐色 (5YR5/8) 細粒砂ブロックをまばらに含む 5. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 径1cm以下の明赤褐色 (5YR5/8) 細粒砂塊を極微量含む 6. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 径1cm程度の礫を極微量含む 木の根をわずかに含む 攪乱内堆積土 7. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 径2cm以下の礫を極微量含む 8. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 径2cm以下の礫を少量含む 木の根を多く含む 旧表土 9. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 10. 明赤褐色 (5YR5/8) 細粒砂 灰黄色 (2.5YR6/2) 粘土を30～40%含む 径3cm以下の礫を多く含む 基盤層 11. 明赤褐色 (5YR5/8) 細粒砂 灰黄色 (2.5YR6/2) 粘土を30～40%含む 径3cm以下の礫を多く含む 基盤層及び攪乱 12. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 攪乱内堆積土 13. 明赤褐色 (5YR5/8) 細粒砂 灰黄色 (2.5YR6/2) 粘土を25%含む 径2～3cmの礫を少量含む 基盤層及び攪乱 14. 暗褐色 (10YR3/4) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 木の根を多く含む 攪乱内堆積土 15. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む

第4図 トレンチ平面・断面図1 (1:80)

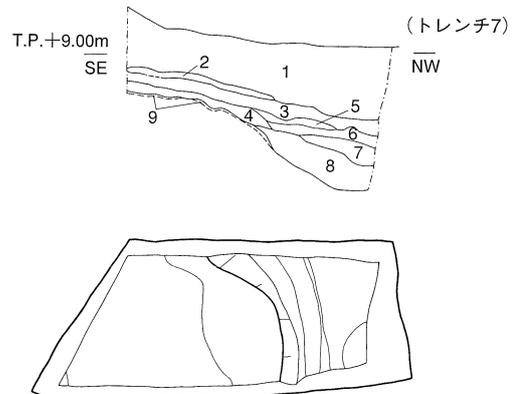
3. まとめ



1. オリーブ褐色 (2.5YR4/4) 細粒砂 橙色 (7.5YR6/8) 細粒砂20~25%含む 径3cm以下の礫を多く含む 表土 2. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 北側に径3cm以下の砂岩を層状に5%含む 径2cm以下の礫を少量含む 斜面堆積土 3. 明黄褐色 (10YR6/8) 細粒砂 径1cm以下の礫をまばらに含む 径3cm程度の径色 (7.5YR6/8) 細粒砂塊を少量含む 盛土 4. 明黄褐色 (10YR6/8) 細粒砂 径1cm以下の礫をまばらに含む 径3cm程度の径色 (7.5YR6/8) 細粒砂塊を少量含む 盛土 5. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 径3~5cmの径色 (2.5Y6/4) 粘土塊を5%含む 径2cm程度の径色 (7.5YR6/8) 細粒砂塊を少量含む 6. 明褐色 (7.5YR5/2) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 径2cm程度の径色 (2.5YR6/4) 粘土塊を少量含む 径3cm程度の径色 (7.5YR6/8) 細粒砂塊を少量含む 7. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 径5mm以下の礫を極微量含む 径1cm程度の径色 (2.5Y6/4) 粘土塊を微量含む 径1cm程度の径色 (7.5YR6/8) 細粒砂塊を微量含む 8. 黒褐色 (2.5YR3/1) 中~細粒砂 径5~30mmの礫・竹の根多く含む 表土及び攪乱 9. 黄褐色 (10YR5/6) 細~中粒砂 径5~10mmの礫多く含む 均質 盛土 南側の2は礫が少ない 10. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径2~5mmの礫多く含む 均質 盛土 11. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径2~5mmの礫少量含む 径1cm前後の基盤層粘土B多く含む 盛土 12. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (~極細粒砂) と黄褐色 (10YR5/6) 細~中粒砂の混合土 径5~30mmの礫・木の根を多く含む 攪乱



1. 盛土 2. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂 径1.5cm以下の礫を少量含む 暗灰黄色 (2.5Y4/2) の粘土塊を10%含む 暗赤褐色 (5YR5/8) 粗粒砂・焼土塊微量含む 盛土 3. 暗褐色 (10YR3/4) 粗~極細粒砂 径2cm以下の礫を微量含む 旧表土 4. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂 径1cm以下の礫を少量含む 旧表土 2 自然堆積上面土 壤化 5. 黄褐色 (10YR5/8) 粗粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 炭化物を微量含む 斜面堆積 6. 5と同じ



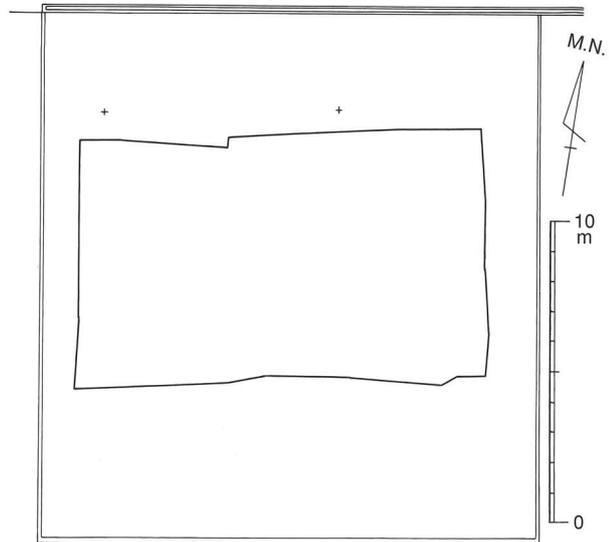
1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土を10%含む 棧瓦を数片含む 盛土 (外部からの搬入) 2. 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂 径1cm以下の礫を少量含む 北西側に暗赤褐色 (2.5YR3/3) 焼土塊を5%含む 炭化物をまばらに含む 3. 暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂 径5mm以下の礫を少量含む 炭化物を多く含む 径20~30mmの暗赤褐色 (2.5YR3/3) 焼土塊を極少量含む 棧瓦を数片含む 旧表土 4. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 径5~10mmの礫を微量含む 炭化物を微量含む 5. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 炭化物を微量含む 6. 黄褐色 (10YR5/8) 極細~細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 炭化物を微量含む 4と同時に堆積 7. 黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂 径1cm以下の礫を微量含む 炭化物を微量に含む 斜面堆積土 8. 褐色 (10YR4/6) 極細粒砂 北西方向に暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂を塊状に40%含む 明赤褐色 (5YR5/8) 極細粒砂を40%含む 基盤層 9. 明黄褐色 (10YR6/8) 極細粒砂 径1cm以下の礫を少量含む 炭化物を微量含む 明赤褐色 (5YR5/8) 極細粒砂を40%含む 基盤層

第5図 トレンチ平面・断面図2 (1:80)

## 第Ⅲ章 新免遺跡第59次調査

### 1. 調査の経緯

当該調査地は豊中市玉井町1丁目247-2に所在する。建築工事に先だって確認調査を実施したところ、地表下約40cmのところ遺構面を検出した。遺構の損壊は避けられず、協議を行った結果、平成16年(2004年)3月3日から平成16年(2004年)3月24日の日程で、114.92m<sup>2</sup>の範囲を対象に発掘調査を行う運びとなった。

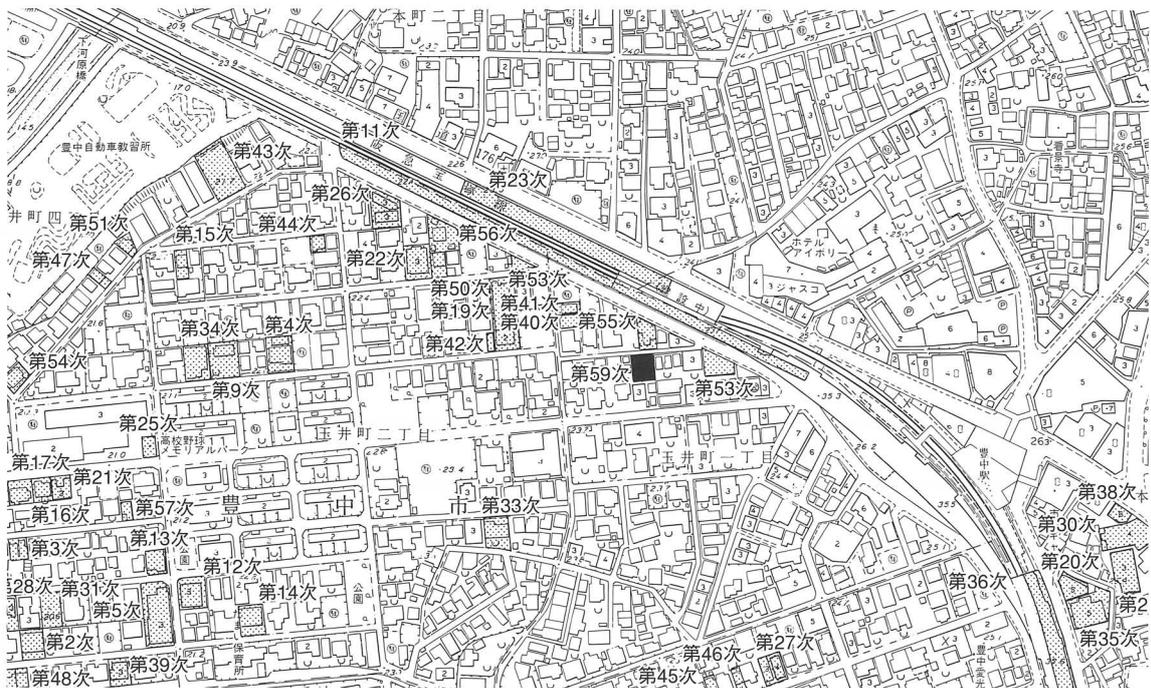


第6図 調査範囲図(1:250)

### 2. 調査の成果

#### (1) 地質環境

当該調査地は、千里丘陵西部から南方に派生する台地状の地形、主として千里川の下刻によって形成された平坦な中(～低)位段丘面に位置する。調査区の約500m西側は、急



第7図 調査地位置図(1:5,000)

## 2. 調査の成果

深な段丘崖をへて狭小な低位段丘から千里川河床面へとつらなる。後期旧石器時代以来の生活面はこの中位段丘面(洪積層上面)に形成されており、拳大から長径が10cmを超えるような亜角礫を主体とした砂礫層及び酸化して黄橙色を呈するシルト主体の堆積層が基盤となっている。従来はこの基盤層上に存在する黒褐色～褐灰色系のシルト層を遺物包含層として把握してきたが、現在ではそうした遺物包含層は小規模な谷地形や斜面地にわずかながら認められるものの、集落全体を被覆するようなものではなく、概ね判別の困難な遺構埋土どうしの重複が遺物包含層の様相を呈するものと理解されている。また、中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にあり、基盤層上の堆積層を成層的に把握することはより困難な状況にある。当該調査地では基盤層直上まで現代の攪乱や耕作が及んでおり、遺物包含層状の堆積層は遺存していなかったため、遺構の検出は基盤層上で行なった。基盤層上には弥生時代以降の遺構埋土に先行して、黒色系の不定形な輪郭が検出されるが、現時点では樹木の根の痕跡(倒木痕)であろうと考えている。弥生～古墳時代にかけての開発行為によって伐採された可能性が高い。

### (2) 検出した遺構と遺物

調査区からは、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴群と溝3条、ピット約40基を検出した。以下、主要な遺構と出土遺物について、概要を述べる。

**掘立柱建物** 調査区北東隅で検出されたSP18、SP12、SP21は他のピットとは明らかに規模が異なり大型である。直径約70cm、深さ約40cmを測り、柱痕以外の掘形埋土は概ね黒褐色系のシルト(～細粒砂)に基盤層ブロックを含むもので、弥生中期以降の遺物包含層、遺構埋土の堆積後から、あるいは土壌化した基盤層最上位を掘削して形成されたと考えられる。等間隔で並ぶ3基の柱穴は掘立柱建物を構成することは明かであるが、主要な部分が調査区外にあると推定されるため、今回はその規格・規模を明確にすることができなかった。出土遺物から概ね6世紀前半～中葉のものであることがわかり、隣接する本町遺跡や周辺での同時期の事例から2間×3間程度の規模ではないかと考えられる。

**溝1～3** 調査区では3条の溝が検出されているが、いずれも6世紀前半～中葉に比定される。SD1は調査区北端で検出され、東西方向に長さ約2m、幅約50cm、深さ約10cmの規模で検出された。SD2は調査区北東隅で検出され、規模的にはSD1と同様で南北方向を指向する。ともに掘立柱建物あるいは住居の排水溝等に利用されたものと考えられる。SD3は調査区西端で南北方向に約8mの長さで検出された。幅は約50～70cmで、深さは南から北に向かって深くなり、最も深い北端では約50cmを測る。集落内での居住域を区切る機能が考えられる。

**ピット** 調査区内では約40基のピットが検出されたが、規模は比較的小さなものが多く、分布も散漫である。一部で弥生中期の土器片等が出土していることから、竪穴住居の主柱穴を構成するようなピットも含まれるが、後世の削平が顕著で明確にはできなかった。

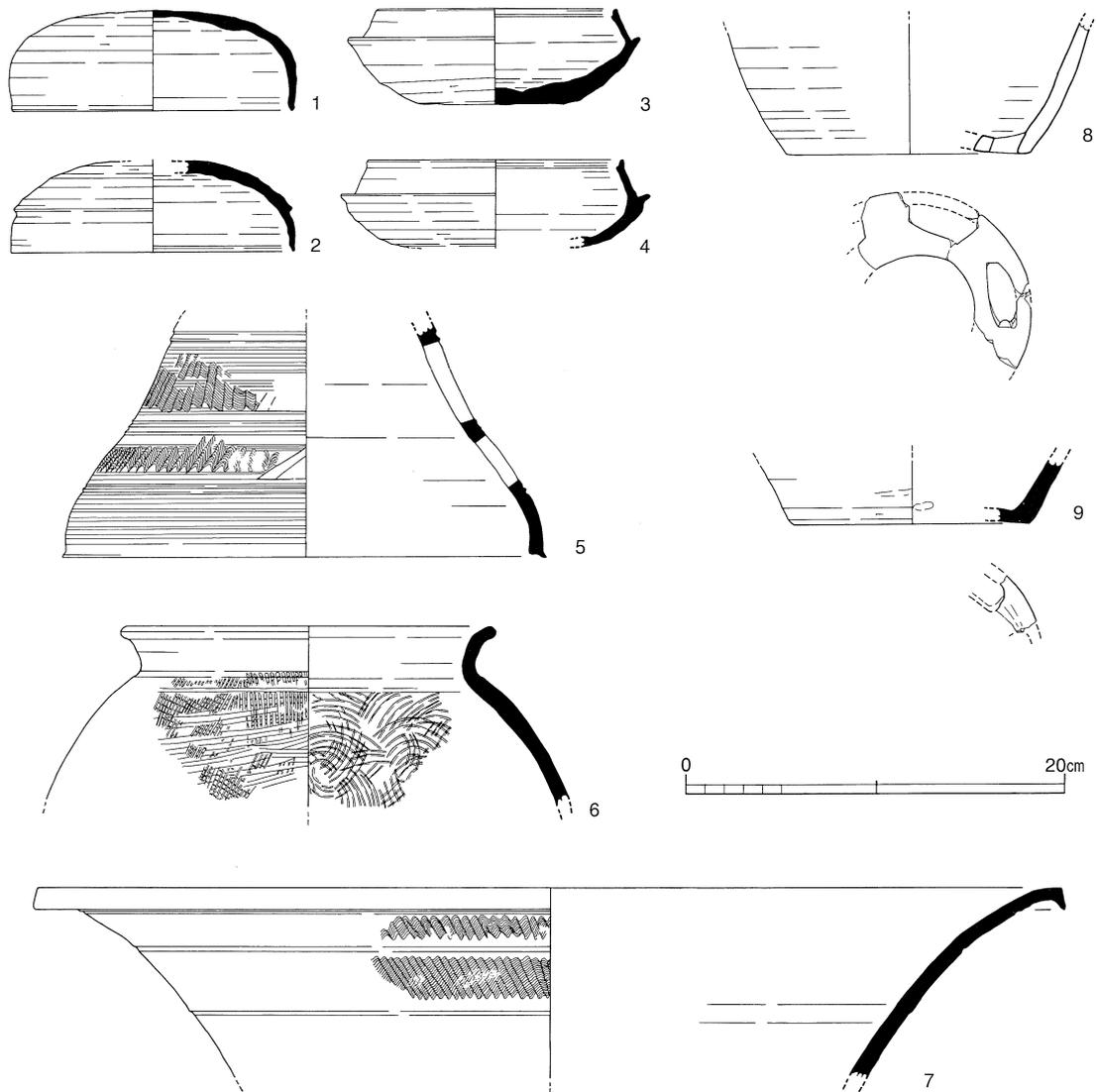


1. 盛土・掘乱土。 2. 褐色土 (10YR5/1) 細粒砂 (～シルト)。旧耕作土。 3. 灰黄色～黒褐色 (10YR4/2～10YR3/1) シルト (～中粒砂)。基礎層プロットクを微量含む。SP23埋土。 4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (～細粒砂)。基礎層プロットクを30%含む。SP18埋土。 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (細粒砂)。基礎層プロットクを微量含む。SP4埋土。 6. 褐色土 (10YR4/4) シルト (～細粒砂)。下部に基礎層プロットクを多く含む。SD3埋土。

第8図 検出遺構平面・断面図 (1:80)

出土遺物 調査区からは弥生土器、須恵器及び土師器が出土しているが、弥生土器と土師器については細片であるため図化できなかった。第9図に掲載した出土遺物はすべて須恵器で、時期的には6世紀の前半～中葉である。1～4は蓋杯である。杯身の口縁端部に明瞭な段が残

### 3. まとめ



第9図 出土遺物（1：4）

り、受部と立ち上がりの接合部は沈線状に凹む。大型で調整の単位も大きく粗雑な作りである。8・9は甑である。中央に円孔、周囲に方形孔を5穴巡らす。8は焼成不良のため、土師器との判別が非常に困難である。

### 3. まとめ

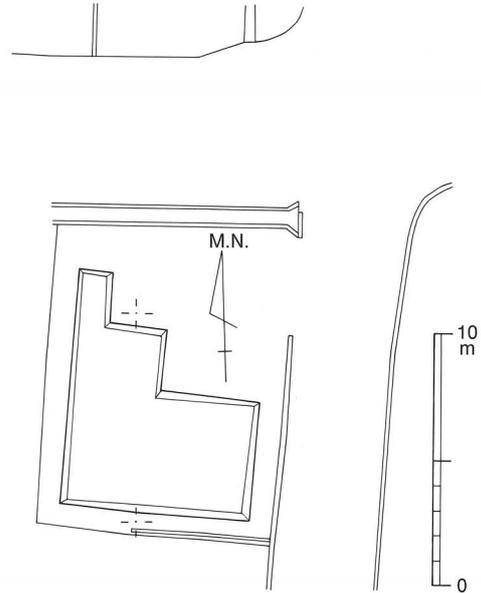
当該調査地周辺では、古墳後期の大規模な集落が展開することが判明しているが、詳細が明確にされていない事象がまだまだ多く認められる。今回の調査区では集落の末端部の状況を検出したものと考えられるが、集落中心部との関係も含めて、今後、周辺の調査がさらに進展することにより、より詳細な状況が解明されることを期待したい。

## 第IV章 上津島遺跡第7次調査

### 1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市上津島2丁目116に所在する。平成16年4月2日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成16年4月8日に確認調査を行ったところ、地表下75～90cmで遺物包含層を確認し、地表下90～100cmで遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されているが、それに伴う基礎掘削時の地盤改良深度が遺構の損壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

調査は平成16年4月21日から平成16年5月28日にかけて56.88㎡を対象に実施した。



第10図 調査範囲図（1：300）

### 2. 調査の成果

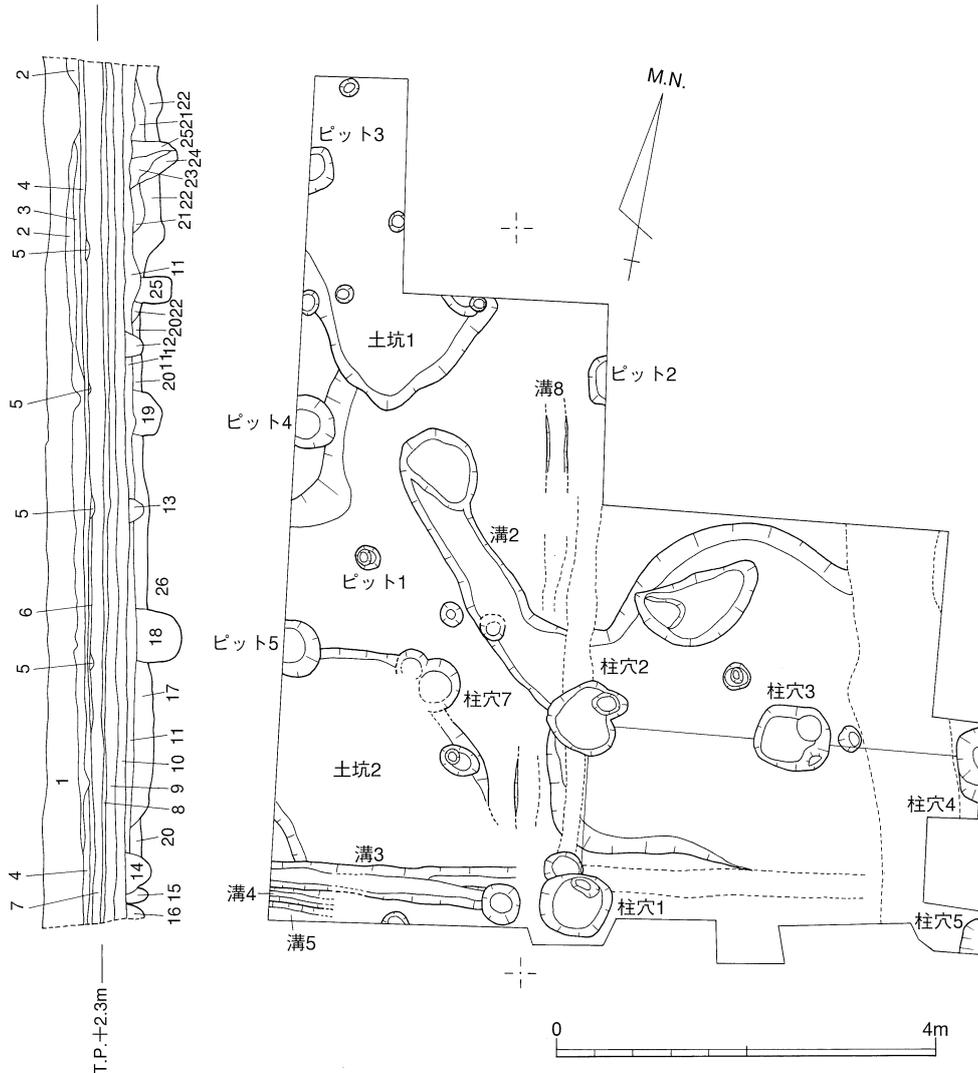
#### (1) 基本層序

今回の調査地は現況地盤から約80～90cmまでは宅地造成時の盛土であった。盛土以下の堆積状況は上津島遺跡第5次調査報告書の基本層序等を参考にすると概ね7層に大別することが可



第11図 調査地位置図（1：5,000）

## 2. 調査の成果



1. 現代の盛土 (第1層)。
2. 灰白色(10YR8/2)極細粒砂。旧耕作土 (第2層)。
3. 灰白色(10YR8/2)極細粒砂。3と似るがしまりが弱く炭粒を多く含む。
4. におい黄褐色(10YR7/3)細～極細粒砂 (第3層)。
5. 灰白色(10YR8/2)極細粒砂～シルト。耕作にともなう東西方向の鋤溝か。
6. におい黄褐色(10YR8/2)極細粒砂 (第3層)。
7. 灰白色(10YR8/2)中～細粒砂。基本層中では最も粒子が粗い。下半部につれてマンガンの結核著しい (第4層)。
8. におい黄褐色(10YR7/3)極細粒砂 (第4層)。
9. 浅黄色(5Y8/3)極細粒砂 (第5層)。
10. 浅黄色(5Y8/3)極細粒砂～シルト。9と似るがマンガンの結核および鉄分を多く含む (第5層)。
11. 褐灰色(10YR5/1)シルト～極細粒砂。(第6層)
12. 褐灰色(10YR5/1～4/1)極細粒砂～シルト。溝1埋土。
13. 褐灰色(10YR5/1～4/1)極細粒砂～シルト。溝2埋土。
14. オリーブ黒色(5YR3/1)シルト。溝3埋土。
15. 暗黄灰色(2.5YR5/2)シルト。溝4埋土。基底部に向かってベースブロックを多く含む。
16. 黄灰色(2.5YR5/1)シルト。溝5埋土。
17. 褐灰色(10YR6/1)シルト。
18. オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。
19. 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト。
20. 灰黄色(2.5YR6/2)極細粒砂～シルト (第7層)。
21. 灰オリーブ色(5YR6/2)シルト～細粒砂。焼土ブロック、炭化物を多数含む。
22. 灰オリーブ色(5YR6/2)シルト。
23. 褐灰色(10YR5/1)シルト。焼土ブロックを若干含む。
24. 褐灰色(10YR5/1)中～細粒砂。炭化物、焼土ブロックを若干含む。
25. 灰白色(5YR7/2)シルト。
26. 灰白色(10YR7/1)極細粒砂～シルト。当調査区のベース。(第8層)

第12図 調査区平面・断面図 (1:80)

能であった。

第1層：現代の盛土。 第2層：旧耕作土。 第3層：灰白色極細粒砂～シルト。旧耕作土直下に堆積する厚さ5cm程度の薄い層である (=床土)。 第4層：灰白色中～細粒砂。基本層

中では最も粒子が粗い。第5層：浅黄色極細砂～極細粒砂。当層と第4層は一連の堆積作用による所産とみられ、上津島遺跡では通有のものである。第6層：褐灰色極細砂～シルト。これまでの砂質を帯びた土層とは一転して粘性の強い褐色系の堆積土である。層中からは古墳時代～奈良時代までの遺物を含んでいるが、中世以降における耕作時の攪拌などによってその大半が碎片によって占められる。上面では主に奈良時代頃の南北、東西方向に走る溝群を検出している。第7層：にぶい黄褐色極細粒砂～シルト。調査区西側を中心に検出された厚さ約10cm程度の堆積層。一見ベース(第8層)に似るがやや砂質が強くしまりが弱く汚れた感がある。同層直上からは飛鳥時代の遺構が掘り込まれている。層中には古墳時代～飛鳥時代の遺物が含まれていたがいずれも碎片であった。なお第7層は直下の第8層上面に形成された凹地を埋めるかのように堆積していることから、整地を目的に人為的に盛られた可能性も考えられる。第8層：灰白色シルト～極細粒砂。当調査区のベース。第8層上面でも第6～7層と同様に飛鳥時代の遺構を検出している。

今回は第6層(第一遺構面)、第8層(第二遺構面)上面においてそれぞれ遺構を検出し調査を実施した。

## (2) 検出した遺構と遺物

今回の調査では、2つの遺構面から溝、土坑、ピットなどを検出した。以下、第一面、第二面と区別したうえで各遺構面における主要な遺構・遺物の概要について報告する。

### ・第一面の遺構と遺物(第13図)

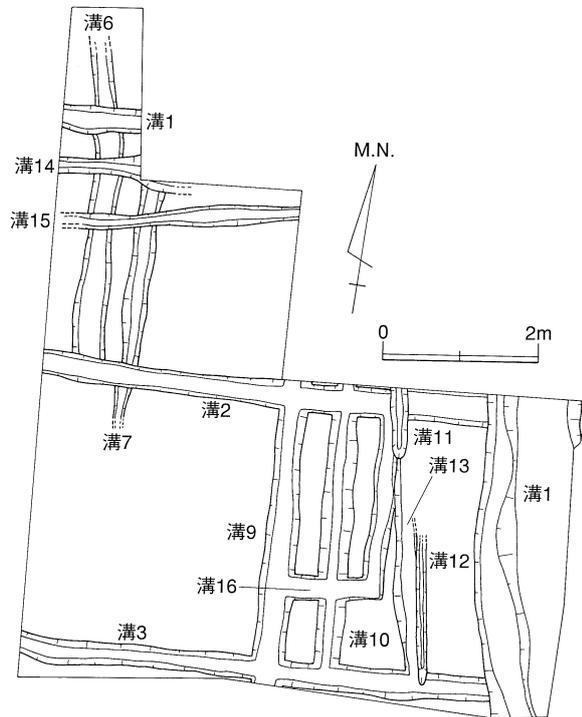
第6層上面において検出された遺構であり、主に東西方向、または南北方向に走る溝群(溝2～溝15)によって構成される。

溝 1 調査区東端部を南北方向に走る溝であり、厳密には北に向かうにつれて西に傾く。検出幅は0.8～0.9m、深さは0.3～0.4mをはかるが、断面観察の結果実際の幅は1.6m、深さは0.4m程度であったものとみられる。埋土は上下2層に大別され、上層は灰白色シルトを主体としつつも埋土中に灰色粗～細粒砂が含まれ粒子が粗い。遺物も碎片を中心に多く出土した。続いて下層は非常に粘性の強い灰色粘土である。遺物は上層を中心に土師器、須恵器、瓦器椀片、白磁片などが出土した(第16図1～3)。

溝1出土の陶磁器は白磁のみで青磁が含まれないこと、瓦器椀はⅢ期の特徴を有するなど、全体として12世紀代の特徴を有することから、溝1は同様の時期に機能し、その後埋没した可能性が考えられる。

出土遺物(第16図1～3) 1、2は白磁である。1は椀の口縁部片であり、先端部は玉縁状の口縁形態を呈する。復元口縁部径は碎片のため若干疑問を残すが17cmをはかる。釉薬は乳白色を呈する。白磁分類のⅡ類に相当しよう。2は椀の底部である。底部径6.8cm、残存高3.6cm

## 2. 調査の成果



第13図 第一面平面図（1：100）

される。

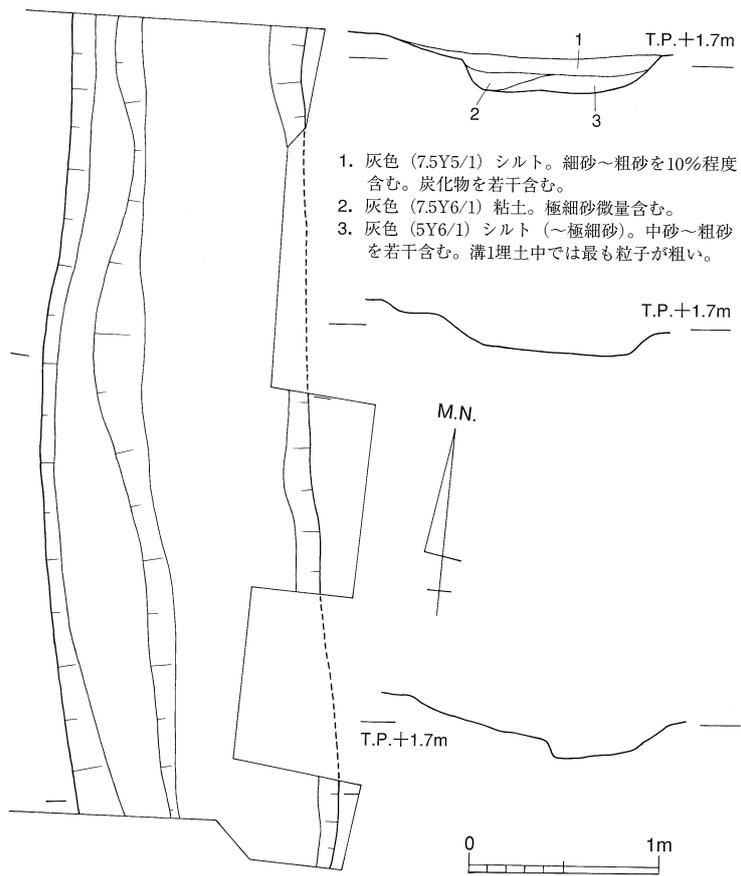
溝群（溝2～溝15） 調査区全域で検出された、東西方向および南北方向に走る溝であり、深度が20cm程度を有する深い溝（溝2～溝6、溝9）と深度が5cmに満たない浅い溝（溝7・8、溝10～溝15）との2種類が存在する。溝群の埋土はいずれも褐灰色シルト～極細粒砂の単一層で構成され、直径1cm程度のベースブロックが少量混ざる。東西方向の深い溝（溝1～3）はおよそ3.5～4m間隔で掘削されている。また溝3～溝6は他の溝群とは異なり一部を重複しながら溝の位置を南側へ移していることがうかがえ、比較的長期にわたって使用されたものとみられる。第一面上ではほぼ全面に耕作に伴う踏み込み痕がみられたことから、溝群の機能時における調査地一帯は耕作地であったことが考えられる。

よってこれらの溝群は耕作地を区画するための溝であったことも考えられるが、各溝の重複関係等をはじめ不明な点も多いことから、今回は可能性の指摘にとどめておく。

をはかる。内面に一条の圈線を有する。釉薬は乳白色を呈するが高台部分には施されない。上述の特徴から白磁Ⅳ類に分類されよう。3は瓦器碗である。碎片ゆえ直径の復元に疑問を残すが口縁部径は約14cmをはかる。口縁部外面にはわずかにヘラミガキがみとめられる以外は指頭圧痕を残すのみである。口縁部内面は幅1～2mm程度のヘラミガキが疎らに施

出土遺物（第16図10、11）  
 11は溝6出土の土師器皿片である。復元口縁部径22.6cm、器高2.3cmをはかり、口縁部端部内面に沈線が一条巡る。内外面ともに摩滅が著しいため調整等は不明である。10は溝8上面出土の土師器甕である。復元口縁部径15.6cm、残存高12.8cmをはかり、球形の胴部を呈する。

これらの遺物は概ね8世紀代の遺物と共伴しており、その他の出土遺物も帰属時期が判明するものは8世紀代までの所産であることから、溝群は8世紀代までに掘削され、その後埋没したものと考えられる。



第14図 溝1平面・断面図（1：40）

・第二面の遺構と遺物（第12図）

ここではベース面（第8層）検出の遺構・遺物について取り上げる。

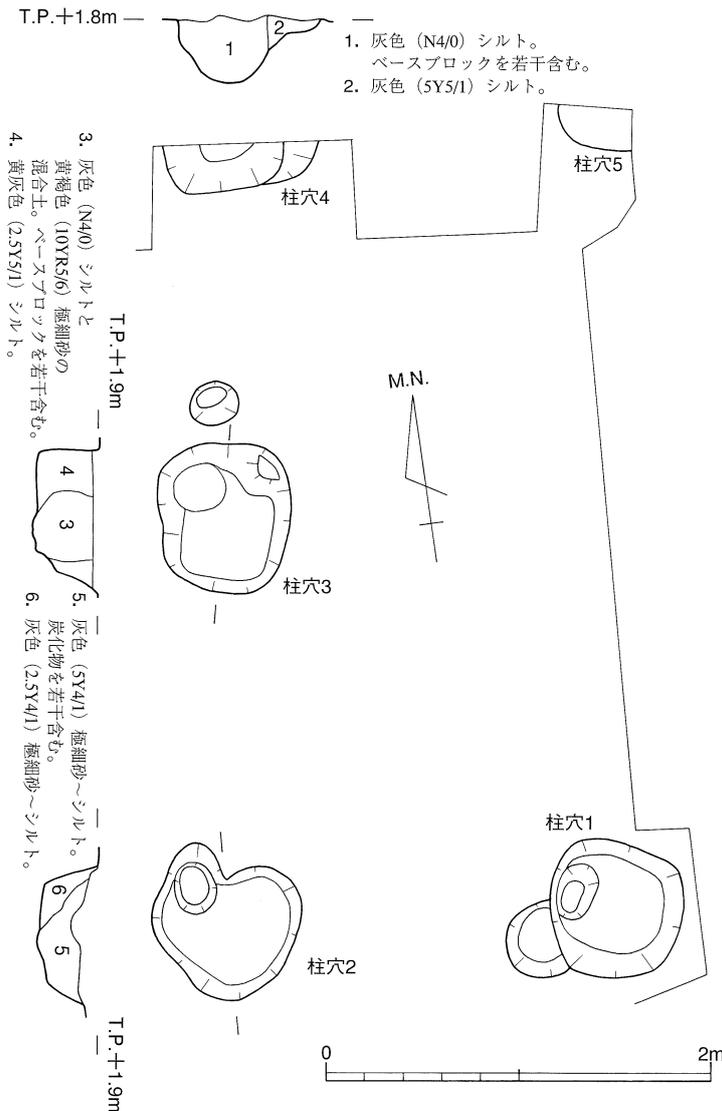
溝 2 調査区西側中央付近で検出した。第12図中では調査区内で収束しているようにみえるが、調査区西壁面でも確認されることから実際は調査区外へさらに伸びていくことが考えられる。検出幅は0.4～0.5m、深度は0.1～0.2mをはかる。埋土は上層が灰色シルト、下層は黄灰色シルトの2層で構成される。遺物は少量であるが須恵器・土師器碎片が出土している。

土坑 1 調査区北端部で検出した。南西部コーナーの状況から平面方形である可能性も考えられるが一部調査区外、および溝2に切られているために詳細は不明である。検出時の幅は0.9m程度、深さは0.25mをはかる。埋土は黄灰色シルト（～極細粒砂）の単一層で構成される。

出土遺物（第16図12） 12は須恵器長頸壺とみられる。頸部～口縁部の形態は欠損のため不明である。底部には外開きの貼付高台を有し、高台部径9.6cmをはかる。底部高台の形態や肩部の張り具合から8世紀代の特徴を有するものと考えられる。

土坑 2 調査区南西部で検出した平面楕円形が考えられる土坑である。短軸の検出幅は2.2m、深度は約0.2mをはかる。埋土は上下二層で構成され、上層は黄灰色シルトに炭化物、土器碎片

## 2. 調査の成果



第15図 掘立柱建物1平面・断面図（1：40）

側の一部を拡張した結果、建物1が総柱構造ではないことを確認している。

建物1は南北方向の長軸が考えられるが、正北からやや東に傾く。各柱穴の中心間の距離は東西が2.2m、南北は2.0～2.1mである。建物1を構成する各柱穴は隅丸方形または長楕円形の平面形を呈している。各柱穴の長軸ラインはそろっていない。柱痕はいずれの柱穴からも確認されなかったため、建物1の廃絶時に抜き取られたものとみられる。

出土遺物（第16図7、13） 7は柱穴2出土の須恵器杯の高台部分である。貼付高台の復元直径は8.4cmをはかる。13も7と同様に柱穴3出土の軒平瓦片である。凸面に斜格子タタキが施される。

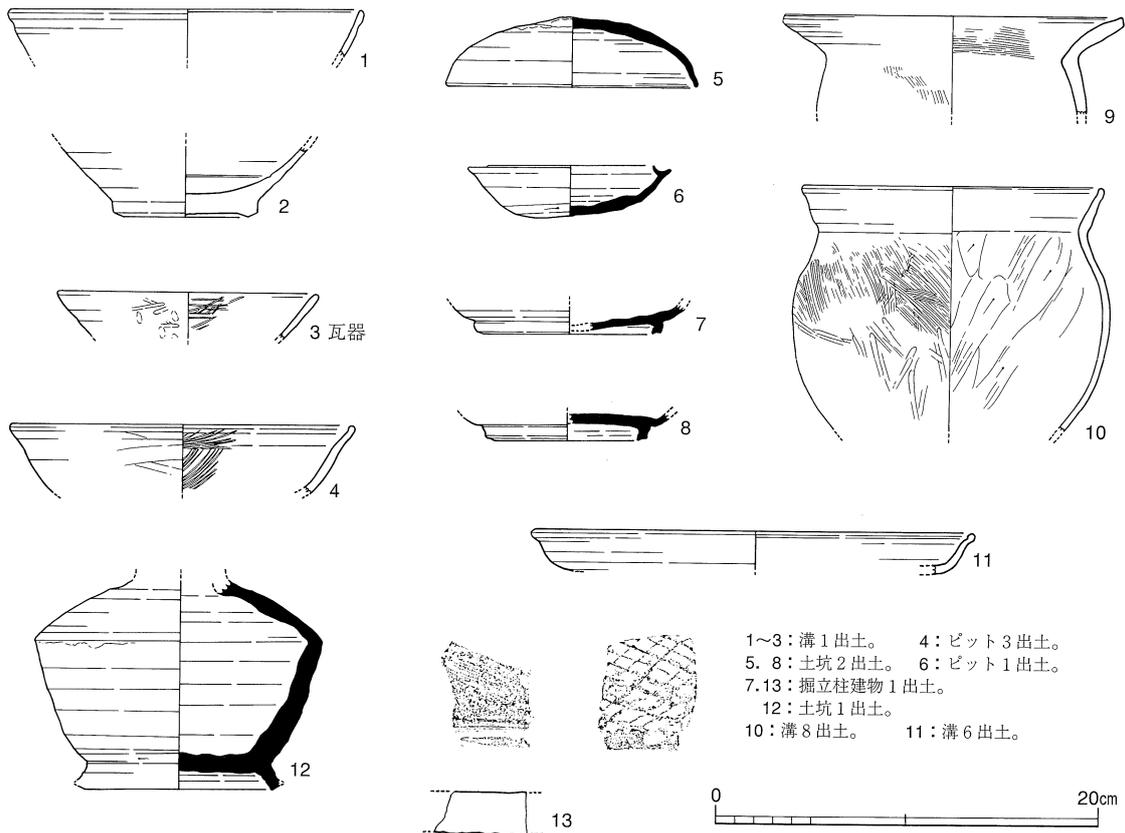
各柱穴からは8世紀後半頃の遺物が主に出土していることから、建物1は8世紀後半頃に機能していたことが考えられ、9世紀代までに廃絶したことが考えられる。

その他の遺構からの出土遺物（第16図4、6、9） 4はピット3出土の土師器杯であ

を多く含む、下層は暗灰黄色シルトにベースブロックを若干含む。

出土遺物（第16図5、8） 図化可能な遺物のみ掲載した。5は須恵器杯蓋である。口縁部径14.6cmをはかる。6世紀後半の時期が考えられる。8は須恵器杯の高台部分である。高台部径8.2cmをはかる。8世紀代の所産とみられる。他の時期が判明する遺物は6～8世紀代に収まっているが、その大半は8世紀代の所産であったことから、土坑2は8世紀代以降に埋没したことが考えられる。

掘立柱建物1 調査区東側で検出した。調査区内では部分的な検出にとどまっているが少なくとも東西2間×南北1間以上である。なお、今回図化していないが、調査区南



第16図 各遺構出土遺物（1：4）

ろう。復元口縁部径は18.4cm、残存高3.5cmをはかる。外面は摩滅によって調整は不明であったが、内面には二段のヘラミガキが確認できる。飛鳥Ⅳ期頃の所産とみられる。6はピット1出土の須恵器杯身である。口縁部径は8.8cm、器高2.9cmをはかる。9はピット3直上で検出された焼土中出土の土師器甕である。長胴形の胴部を呈するものとみられる。復元口縁部径は17.8cmである。

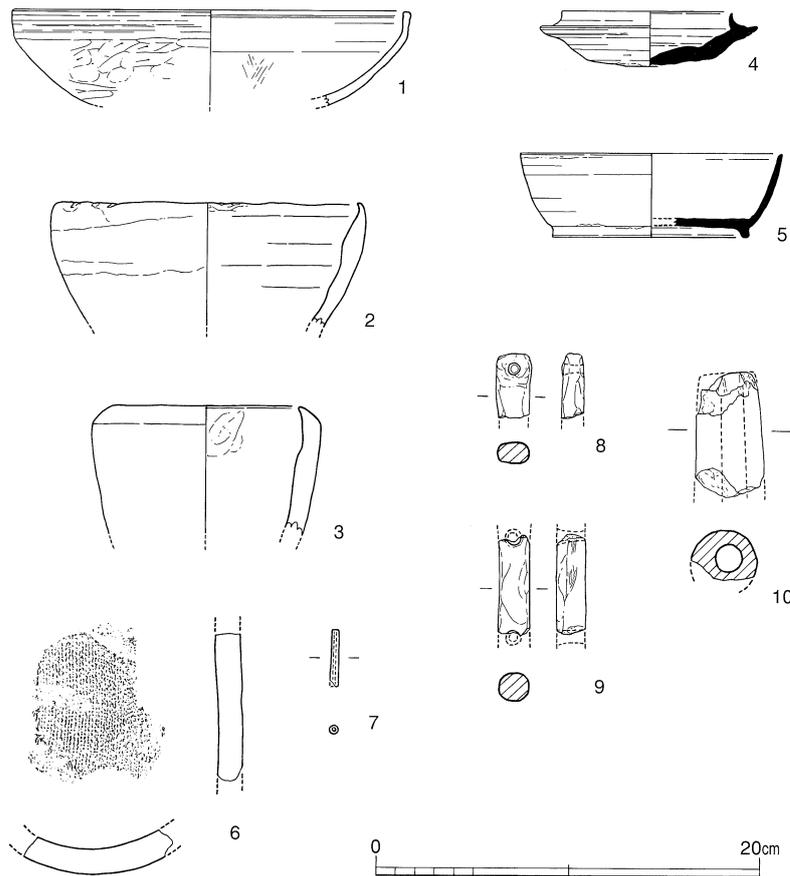
・包含層出土遺物（第17図1～10）

ここでは基本層第6・7層中出土の図化可能な遺物について取り上げる。なお、6・7層の遺物は本来は個別に報告を行うべきだが、それぞれの出土遺物が似通っており時期差の抽出が困難であったため両層を一括した報告を行う。

1は土師器碗である。復元口縁部径は19.8cm、残存高4.8cmに達するが碎片ゆえに疑問を残す。外面にはヘラケズリが広範囲にみとめられる。口縁部外面には強い横ナデの痕跡が凹線状に残る。

2・3は製塩土器の口縁部片とみられる。主に調査区東半部の包含層～各遺構中から出土した。調査区全体で6点出土しており、いずれも碎片かつ他の遺物に混ざっての出土状態であった。復元口縁部径は2が16cm、3が9.8cmをはかる。2・3およびその他の碎片の形態的な特徴

### 3. 調査の成果



第17図 包含層出土遺物（1：4）

からみて、完形に復元すると底部は丸底で外開き気味の口縁部になるものと考えられる。2・3はいずれも器厚1cm前後、内外面には接合痕が明瞭にみとめられるものが多い。外面調整はナデによる仕上げの後に指押えを施す。内面は端部付近は横ナデ、以下は斜位または縦方向のナデによって仕上げられる。また、灰白色の砂粒（0.5～2mm程度）を多く含んだ胎土は在地のものとは明らかに特徴が異なっていることから、これらの製塩土器は他地域から持ち込まれたものと考えたい。今回

出土の製塩土器は平城京左京八条三坊遺跡や松原市大堀城遺跡において類例が出土しており、これらは概ね8世紀中頃～9世紀初頭頃の遺物と共伴することから、2・3もほぼ同時期の所産とみて大過ないものとする。

4・5は須恵器杯である。4はほぼ完全な形で出土したものであり、口縁部径9.4cm、器高2.9cmをはかる。全体的に器壁が厚く粗雑な仕上げという印象を受ける。7世紀前葉頃の所産とみられる。5は杯Bである。復元口縁部径は13.4cm、器高4.5cmをはかり、底部に貼付高台を有する。8世紀代の所産とみられる。

6は軒丸瓦片であろう。凸面は表面が摩滅しているため調整は不明であったが凹面には布目痕が確認できる。

7は包含層中出土の管玉である。今回の調査地から北西約150m地点で実施された第5次調査でも同様の管玉が3点出土している。今回出土の管玉は直径4mm、全長2.9cm、孔径2mmをはかり、両端は丸みを帯びる。孔の中央部には段差がみとめられ両面からの穿孔である。石材は緑色の色調を呈するものである。

8～10はいずれも包含層出土の土錐である。8・9は棒状土錐片であり、8は扁平な形態を

有する。形態はやや異なっているが8・9ともに片側の端部あるいは両端部に直径5mm程度の孔を穿っている。10は破片のため詳細は不明であるが、直径3.5cm、残存長6.5cmをはかる管状を呈するもので、中央に径1.2cm程度の孔が貫通する。8～10はいずれも同様の機能を有していたことが考えられるが、それぞれの帰属時期については包含層出土ゆえに明らかにできなかった。

### 3. まとめ

今回は少なくとも四つの時代の遺構・遺物を検出し、各時代ごとに一定の成果が得られた。以下では、主要な成果について報告を行う。

**溝1について** 豊中市史（以下「市史」と略称）によると、調査地周辺は条里制の施行が想定されている。市史による条里復元図を参考にする限りでは、今回の調査地が豊嶋郡条里南条の「字十九」という条里の遺称地内に所在することが注目される。地割復元図に基づく「字十九」の所在地は豊嶋郡条里南条のうち八条の二里内であることがうかがえる。さらには調査地北側の東西方向に走る道路または水路、および東側の南北方向の道路は八条の二里内の坪境であった可能性が考えられ、かつて調査地一帯が整然と区画された土地の一部であったとみて間違いなからう。

今回の調査によって溝1が機能していたとされる平安後期頃、つまり12世紀代になって調査地付近では条里制に基づいた地割りが実施され、溝や畦によって土地区画がなされていた可能性が高くなった。とすると、豊嶋郡南条は遅くとも12世紀代までには地割りが施行されていたものとみられ、溝1は市内における豊嶋郡南条の施行時期を推定するうえで貴重な発見であったといえる。市内の条里関連遺構はこれまでに、豊島北遺跡第3次調査で確認された豊嶋郡北条と仲条を区画したとみられる東西方向の溝状遺構と、服部遺跡第5次調査検出の溝状遺構が確認されており、溝1はこれらに次ぐ条里関連遺構の発見ということとなった。

**製塩土器について** 今回は7～8世紀の製塩土器が出土した。以前、第5次調査報告書では古墳時代の製塩土器について検討がなされ、まず焼き塩が容器とともに持ち込まれたことを前提として、第5次調査出土の製塩土器は総重量にして4.4kgと一遺跡の出土量としては相当多い事例であるとし、その背景として交通の要衝という地理的特性とともに周辺集落への再分配が含まれているとの見方が示されている。

今回出土の製塩土器は、古墳時代から時期が大きく降ることや調査面積が第5次調査地の約5分の1であったこと、さらに今回の調査地が既往の調査地よりもやや南側であったことが影響していることも考えられるが、古墳時代の製塩土器の出土状況とは大きく異なり総数は6点に過ぎず、いずれも碎片であったことなど、上津島遺跡が焼き塩の生産・流通の拠点たる状況はみとめられない。現在7～8世紀代の製塩土器は、本遺跡内において土器製塩遺構が未確認であることと、胎土が上津島遺跡とその周辺のものとは異なることなどを踏まえるならば、古

### 3. まとめ

墳時代と同様に他地域から容器とともに搬入されたものと考えたい。ただし8世紀代の上津島遺跡は、第6次調査で検出された大形掘立柱建物に代表されるように猪名川沿いの港湾集落の一角を形成していたことが明らかになっている。よって今回の調査地は8世紀代の集落の中心地からやや離れた位置であった可能性も考えられ、今回の調査のみで当該遺跡における古墳時代以降の製塩土器の評価を行うことは時期尚早であろう。

**古墳時代の遺構・遺物について** 今回、古墳時代の遺物が比較的まとまって出土したものの遺構は未検出であった。しかしながら遺物包含層中からは土師器、須恵器片に混ざって円筒埴輪、朝顔形埴輪片がみとめられたことから、付近には集落だけでなく古墳も所在した可能性が考えられる。周辺では利倉南遺跡で5世紀代の方墳を検出しており、上津島遺跡内でも第5次調査で古墳時代の遺物中に円筒埴輪片も含まれており、調査地付近に古墳時代の遺構または古墳が所在した可能性は高いことを裏付けるものといえる。

今回の調査は調査面積が狭小であったため、第一面で検出された溝群の展開や、8世紀代の掘立柱建物がどのような配置をみせ、どのような集落景観を呈していたのか、など各時代の詳細な集落の様相については明らかにし得なかった。これらの課題は、今後周辺の調査成果の蓄積を待って検討する必要がある。

#### 【参考文献】(順不同)

- 「第四節 律令時代の豊中地方」『豊中市史』第一巻 豊中市史編纂委員会編 1961
- 「第6節 製塩土器について」『上津島遺跡』第5次発掘調査報告 1997 上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 「豊島北遺跡第3次調査」『豊中市埋蔵文化財年報』4 1997 豊中市教育委員会
- 清水 篤「豊島北遺跡の条里遺構について」『条里制研究』第11号 1995 条里制研究会
- 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995 中世土器研究会 所収の各論文
- 岩本正二「7～9世紀の土器製塩」『文化財論叢—奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集—』1983 同朋社
- 「第2節 製塩土器」『大堀城遺跡』 1984 大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 「第5節 製塩土器の若干の考察」『大堀城遺跡』Ⅱ 1985 大阪府教育委員会・大阪文化財センター

## 第V章 新免遺跡第60次調査

### 1. 調査の経緯

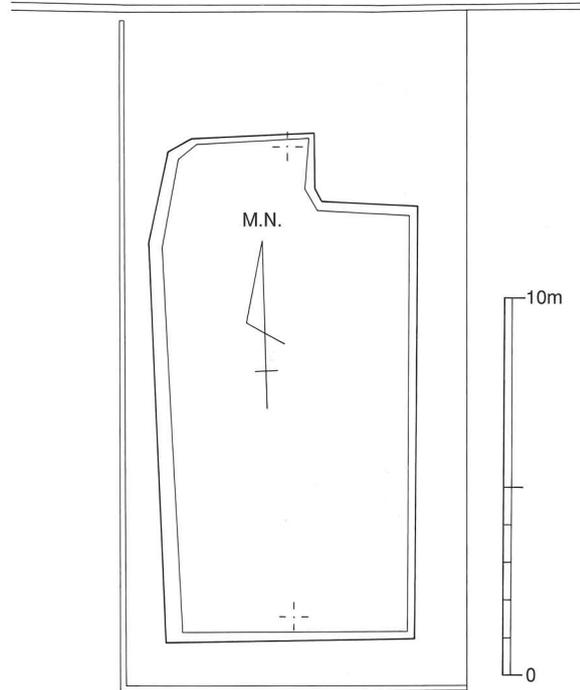
当調査区は、豊中市玉井町2丁目196-2に所在する。平成16年8月5日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、平成16年8月19日に確認調査を行ったところ、地表下約25～30cmで遺物包含層を検出し、同じく35～40cmで遺構面を確認した。基礎掘削時の地盤改良深度が地表下140cmにまで達することから、遺構の損壊を免れないことが判明した。協議の結果、平成16年8月30日から平成16年9月24日にかけて108㎡を対象として本調査を実施した。

### 2. 調査の成果

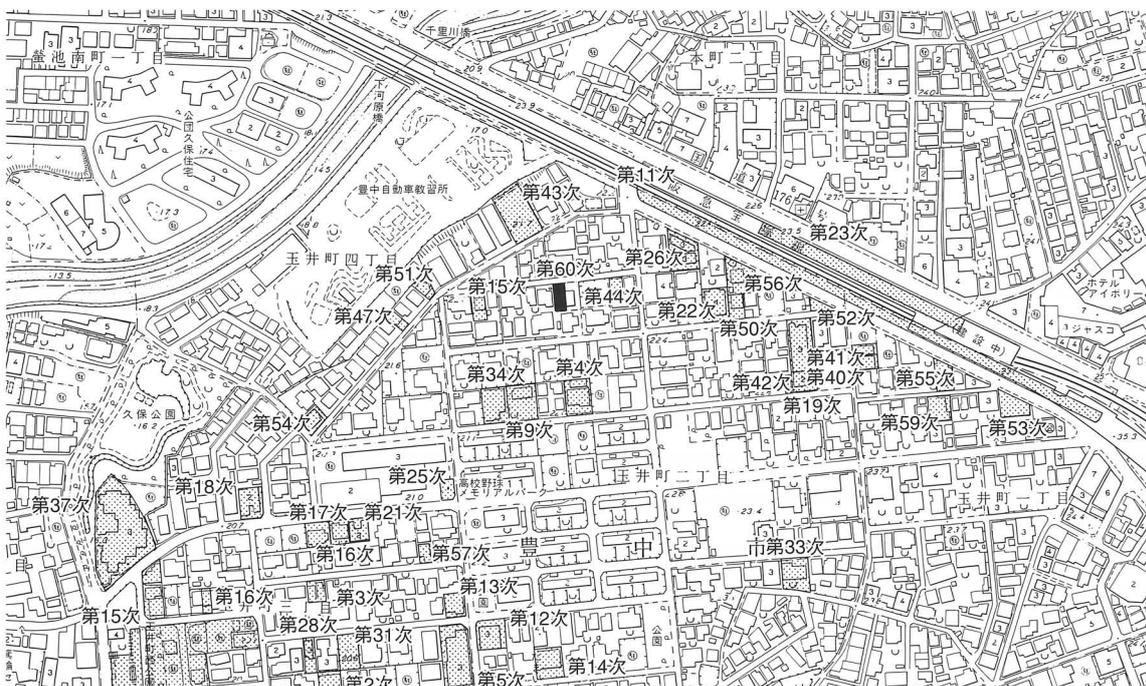
#### (1) 基本層序

今回の調査地における基本層序は地表下30～

35cmまでは現代の盛土（第1層）で覆われ、続いて弥生時代～古墳時代の遺物包含層であるに

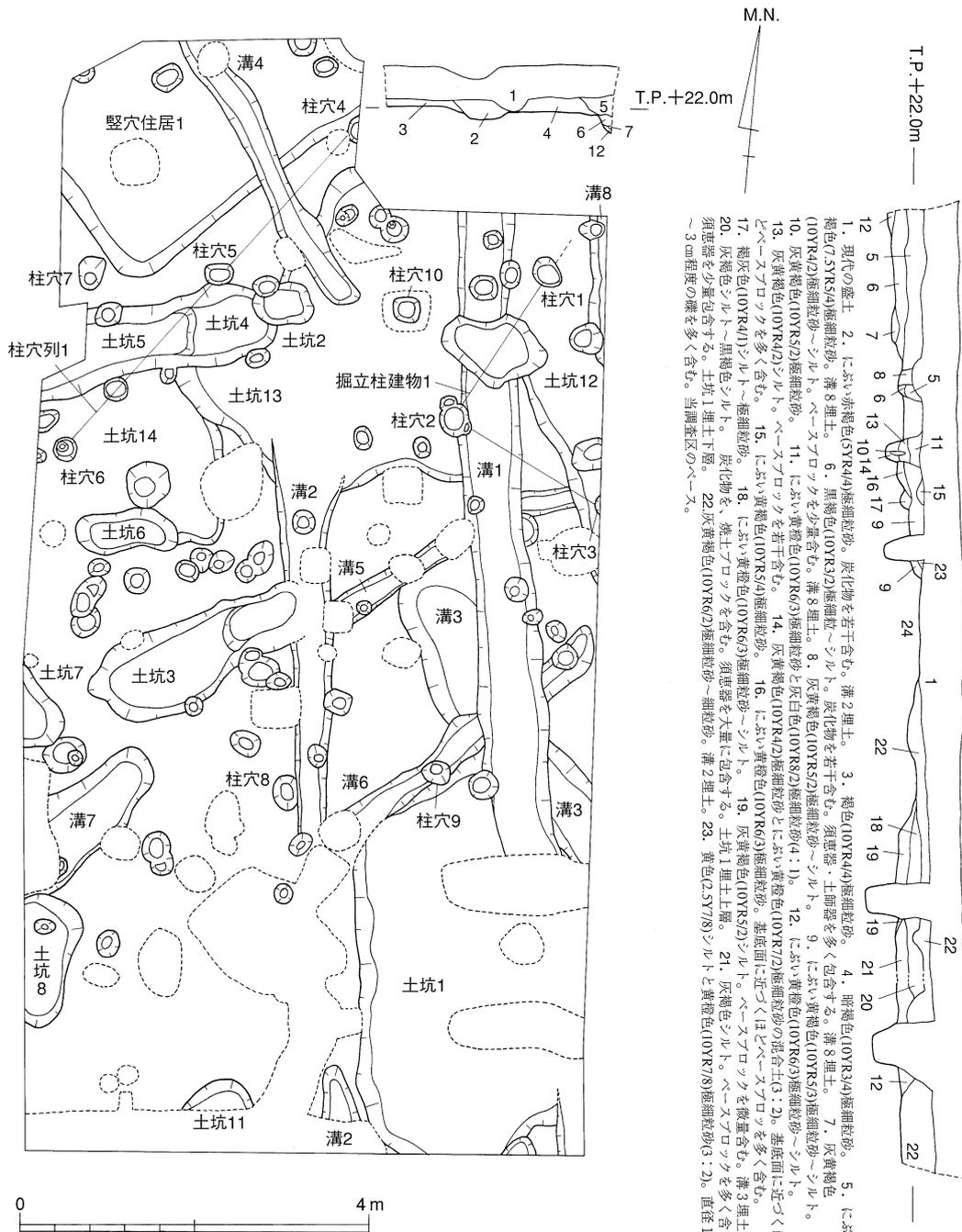


第18図 調査範囲図（1：200）



第19図 調査地位位置図（1：5,000）

2. 調査の成果



第20図 調査区平面・断面図 (1:80)

ぶい黄褐色極細粒砂～シルト層 (第2層)、その直下に当調査地のベースである黄色シルト (～極細粒砂) 層 (第3層) の順に堆積する。

なお断面では明確に観察しえなかったが、第1層と第2層間には旧耕作土とみられる褐灰色極細粒砂を包含層直上で部分的に確認しているが、これは宅地開発時に削平を受けたために一部がかるうじて残存したものとみられる。また、遺構の一部は遺物包含層 (第2層) から掘り込まれているが、遺構埋土と遺物包含層 (第2層) の土質が類似しており両者の識別が困難で

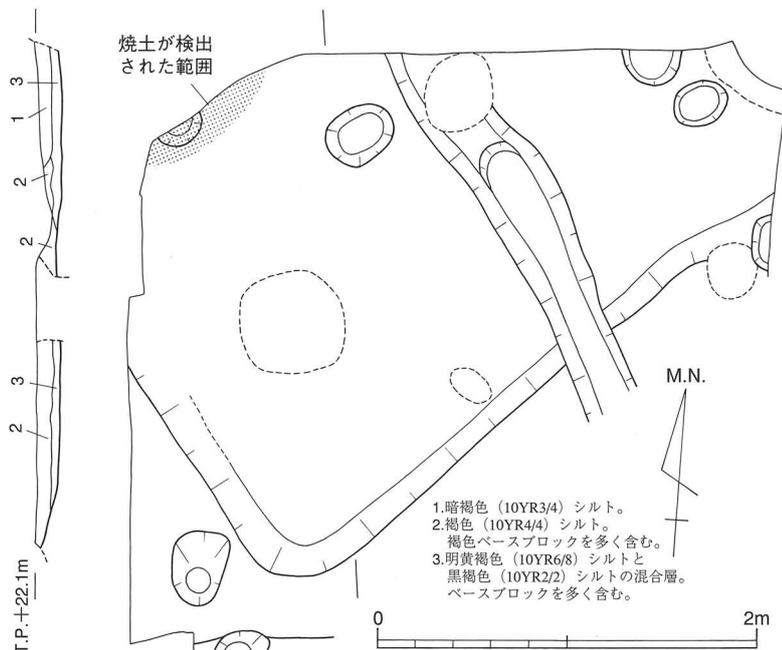
あったことから、今回の調査では最終的に第3層（ベース）上面において遺構検出を行い、調査を実施した。

(2) 検出した遺構と遺物

今回の調査ではピット約70基、土坑14基、溝8条をはじめ多数の遺構を検出している。以下、主要な遺構・遺物について報告を行う。なお今回の遺構名（遺構番号）は主要な遺構にのみ付している。

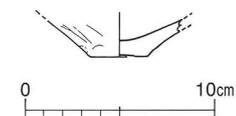
**竪穴住居 1** 調査区北端部において、一辺3.2m以上の方形または隅丸方形とみられる竪穴住居の一部を検出した。基底面直上を覆うベースブロックを多数含んだ明黄褐色シルトは竪穴住居1にともなう貼り床であったことが考えられる。住居内では壁溝、明確な支柱穴は確認されていない。北壁際において幅約60cm、厚さ約3cmにわたって焼土が素焼きの土器片とともに集中する範囲を確認しており（第21図スクリーントーン部）、地床炉であった可能性も考えられる。遺物は焼土周辺を中心に出土しており、外面にタタキを有する甕形土器などが出土していることから、竪穴住居1は弥生時代後期～終末期頃に営まれていたものとみられる。

**出土遺物（第22図）** 素焼きの土器碎片が多数出土したが、図化できたものは1点に限られる。第22図は甕形土器底部であろう。底部径3cmをはかり、いわゆる凸レンズ状の底部を呈するものである。内外面ともに摩滅が著しいものの、外面の一部でナデによる調整が確認できた。これらの特徴から当該出土遺物は弥生時代後期～終末期の所産と考えられる。



第21図 竪穴住居1平面・断面図（1：40）

**掘立柱建物 1** 調査区北東端で検出した建物の一部である。予想される建物は北西～南東方向、南西～北東方向ともに1間以上であるものとみられる。各柱穴（柱穴1～3）の規模はいずれも直径40cm程度、深度も40cm前後であり、それぞれ明瞭な柱痕が確認された。いずれも



第22図 竪穴住居1出土遺物（1：4）

## 2. 調査の成果

埋土中に須恵器片を含むことから、建物1は古墳時代後期に属するものと考えられる。

**柱穴列1** 調査区北側で検出した、3基の柱穴から成る柱穴列である。柱穴4～5、柱穴5～6の中心間距離はそれぞれ2.4m、2.7mをはかる。各柱穴の埋土には須恵器が含まれないことから柱穴列1は弥生時代～古墳時代前期頃に営まれたものと考えられる。柱穴列1は本来建物の一部を構成していたかもしれないが、調査区内にこれと対応する柱穴列がみとめられなかったため今回は柱穴列として扱った。

**溝1・溝2** 調査区内を南北方向に縦断する2条の溝であるが、両者ともに南に向かってやや東を向く。検出時の幅はそれぞれおよそ0.8m、深度は0.25mをはかる。各溝の中心間隔はほぼ2.2mのまま等間隔で走っていることから、2条の溝が一連のものとして機能していたことが考えられるが、その目的については不明である。溝の基底面の深度は少なくとも調査区内においてはほぼ一定であり、南北いずれかに傾斜している状況は確認されなかった。埋土は褐色極細粒砂（～シルト）の単一層であり、埋土中には0.5～2cmの礫が若干含まれる。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の碎片が中心であったが、溝1からは微量ながら瓦器碗の碎片も含まれていたことから溝1は中世以降に埋没したものとみられ、溝2も瓦器碗はみられなかったものの溝1と同様の経過を辿ったものと考えられる。

**溝3** 調査区東側で検出した南東から北西方向に伸びる溝であり、北西側は調査区内で収束する。検出時の幅は0.7～0.8m、深度は0.1mであるが、東壁面を参考にすれば実際は0.2m以上有していたものとみられる。埋土は灰黄褐色シルトの単一層であり、埋土中からは弥生土器が出土している。溝3は出土遺物（第23図）の特徴から弥生時代中期の所産と考えられる。

なお溝3と後述する土坑3は、いずれも弥生中期に帰属することに加え、両者の位置関係からみて方形周溝墓としての可能性も考えられた。しかし、まず対面する位置に同様の溝（または土坑）が検出されなかったこと、次に各埋土も流れ込んできたような状況ではなく比較的水平的な堆積であったこと、さらに墳墓祭祀に関わる遺物も出土していないことから、方形周溝墓としての状況証拠には乏しいことが判断される。よって今回は、溝と土坑が各々別個の性格を有していたものとした上で報告を行う。

**出土遺物（第23図）** 大形の壺あるいは甕形土器の底部とみられ、溝の基底面にほぼ接した状態で出土した。底部径8.2cm、残存高は11cmをはかる。外面には縦方向のミガキが施され、内面はハケによる調整がなされる。

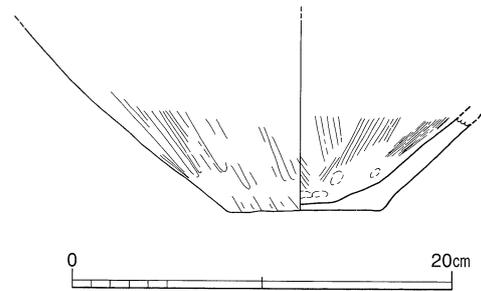
**溝4** 調査区北端部で検出した、南東から北西方向に走る溝である。検出幅、深度ともに0.25mをはかる。他の溝とは異なり幅が狭く基底面への傾斜が急である。埋土は暗褐色シルトの単一層で構成され、ベースブロック、炭化物を少量含む。溝中からの遺物は須恵器を中心に土師器、弥生土器片が上下万遍なく出土したが大半が碎片であったため、図化できたものは須恵器4点に限られた（第24図1～4）。これら須恵器の特徴からみて、溝4は古墳時代後期初頭前後に機能していたことが考えられる。

出土遺物（第24図1～4） 1～3は杯身である。1・2はいずれも口縁部径は10cm前後に収まる。3は口縁部端部が欠損しているが復元口縁部径は9.5～10cm程度であり、形態も1・2と一致することから、1・2とほぼ同時期の所産と考えられる。4は甕である。残存高は8.3cmをはかり、頸部全体に波状文、胴部最大径部分に櫛描列点文が巡る。口縁部は欠損しているが残存部分から判断するとさらに大きく開く形態が考えられる。

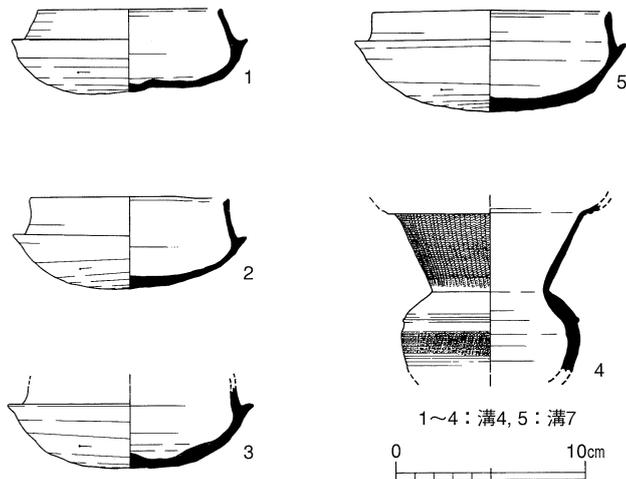
溝 7 調査区南西部で検出した、南西から北東方向に走る溝である。検出時の幅は0.6～0.8m、深度は0.1m程度をはかる。埋土は灰黄褐色極細砂～シルトの単一層であり、直径1～2cm程度のベースブロックを若干含む。埋土中から主に須恵器が出土したが大半は碎片であった。出土した須恵器杯身（第24図5）の特徴から、溝7は古墳時代後期前葉頃に機能し、その後埋没したものとみられる。

土坑1 調査区南東部で検出した、廃棄土坑とみられる遺構である。検出時点における平面形は、一部調査区外へ伸びていることから詳細は不明であるが、少なくとも東西幅3.5～4m、南北幅5.5～6mのいびつな楕円形になるものとみられる。深度は最深部において約15cmをはかり、比較的平坦な基底面を有していた。基底面上からは土坑1に関連する遺構は確認されていない。埋土は上下2層に大別可能であり、上層は灰褐色～黒褐色シルト（～極細粒砂）に炭化物を多く含み、部分的に焼土ブロックがみつめられた。下層は褐灰色シルトに径1～3cm程度のベースブロックを多く含むものであった。埋土中からは多量の須恵器とともに、土師器、弥生土器が少量出土したが、弥生土器は混入とみられる。大半の須恵器は上層中からの出土であり、下層からは少量の出土にとどまる。これらの多量の須恵器は、土坑南半部を中心に基底面からやや浮いた状態での出土状況をみせていることから、土坑1が掘削され本格的に須恵器が投棄されるまでに時期差が存在した可能性が推定される。

今回出土した多量の須恵器は完形品または残存部を多く残す破片が非常に多くみられたが、それらの中には焼成不良品も若干含まれていたことから、実際に使用された須恵器の他に使用されずに投棄された須恵器も含まれている可能性が考えられる（※第24～27図に掲載した須恵

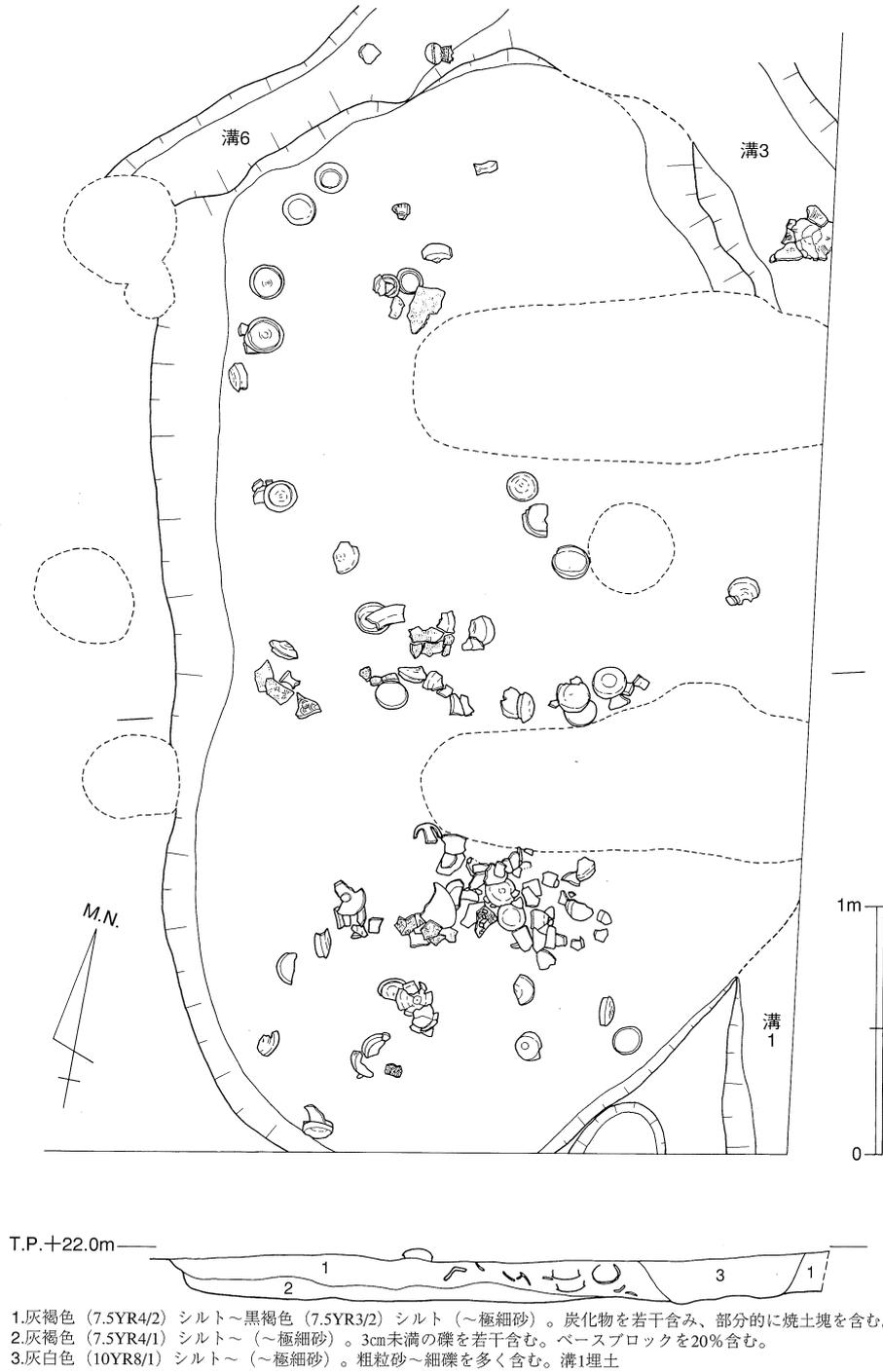


第23図 溝3出土遺物（1：4）



第24図 溝4・溝7出土遺物（1：4）

2. 調査の成果



第25図 土坑1遺物出土状況図 (1:30)

器66点中19点 (29%) が焼成不良品。なお、須恵器の一部は折り重なった状態で出土しているが、いずれも日常的な投棄のなかで偶然発生した事象であった可能性が高く、出土状況を観察した限りにおいては意図的な配置はみとめられなかった。

なお土坑1出土須恵器は6世紀初頭前後 (TK47型式期) を主体としながらも6世紀前葉頃 (MT15型式期) までの須恵器が含まれることから、土坑1は廃棄が始まって完全に埋没するま

でに少なくとも須恵器一型式分程度の期間（およそ四半世紀）を要したことが考えられる。出土須恵器の特徴から土坑1は5世紀末葉以降に形成され、6世紀前葉以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物（第26図～第29図） 今回の報告は、埋土下層の層厚が薄かったことと、上下層間で須恵器の形態的な差異の抽出が困難であったことから上下層を一括したものになっている。なお焼け歪んだ須恵器の図化にあたっては、口縁部分のなかで歪みが小さい箇所から口縁部径の復元を行っている。

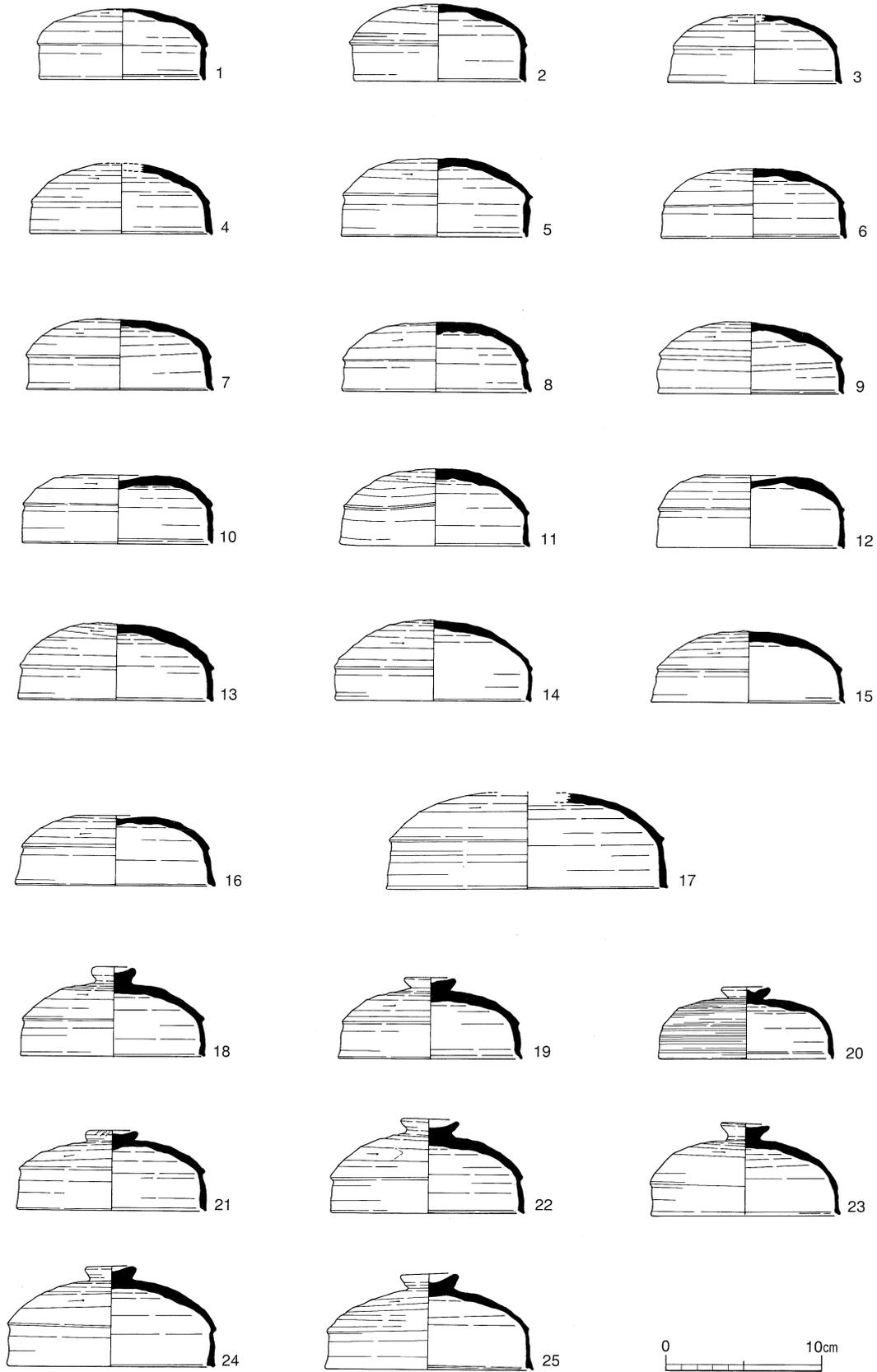
杯蓋（第26図、第27図26～29） 図化し得た杯蓋29点の平均口縁部径は11.71cmであり、全体の約7割が10～11cm代のなかに収まる。つまみを有するタイプ（第26図18～25）は一部有蓋高杯とセットになる可能性もありうるであろう。天井部と口縁部を分ける境界部分の形態に着目すると、明瞭な稜を形成するタイプ（23点：第26図1～23）と、凹線あるいはにぶい稜によって形成されるタイプ（6点：第26図24・25、第27図26～29）に大別可能である。その結果8割近くが明確な稜を有するタイプであった。第26図17のように口縁部径約18cmの大形品もみられるが、形態的な特徴は他の杯蓋とほぼ共通することから、ここでは同時期の杯蓋におけるバリエーションの一つと捉えておきたい。第27図29は一見土師器椀と見間違ふような形態的な特徴を呈するが、天井部付近にかすかに回転ケズリが確認できたため須恵器と判断した。口縁部径12.3cm、器高4.0cmをはかり、天井部と口縁部の境界は口縁端部に平坦面を有する。

杯身（第27図30～48） 図化し得た杯身の平均口縁部径は10.28cmであり、半数以上が口縁部径10cm代であった。口縁端部に沈線あるいは段を有するタイプ（16点：第27図30、32～40、42～44、46～48）と端部が平坦なタイプ（3点：第27図31、41、45）に分類可能であったが、分類の結果大部分が前者のタイプであった。ただし両タイプが上層中から混在した出土状況であったことを考慮する限り、両タイプの型式差は時期差を反映したものというよりは同時期における製作技術系統の差と捉えておきたい。これらの杯身は口縁部径をみる限りは大形化の直前、口縁部径が最小化を迎える段階の所産と考えられる。第27図40、42は底部にヘラ記号が施されており、いずれも多条の線をモチーフとしたものであった。

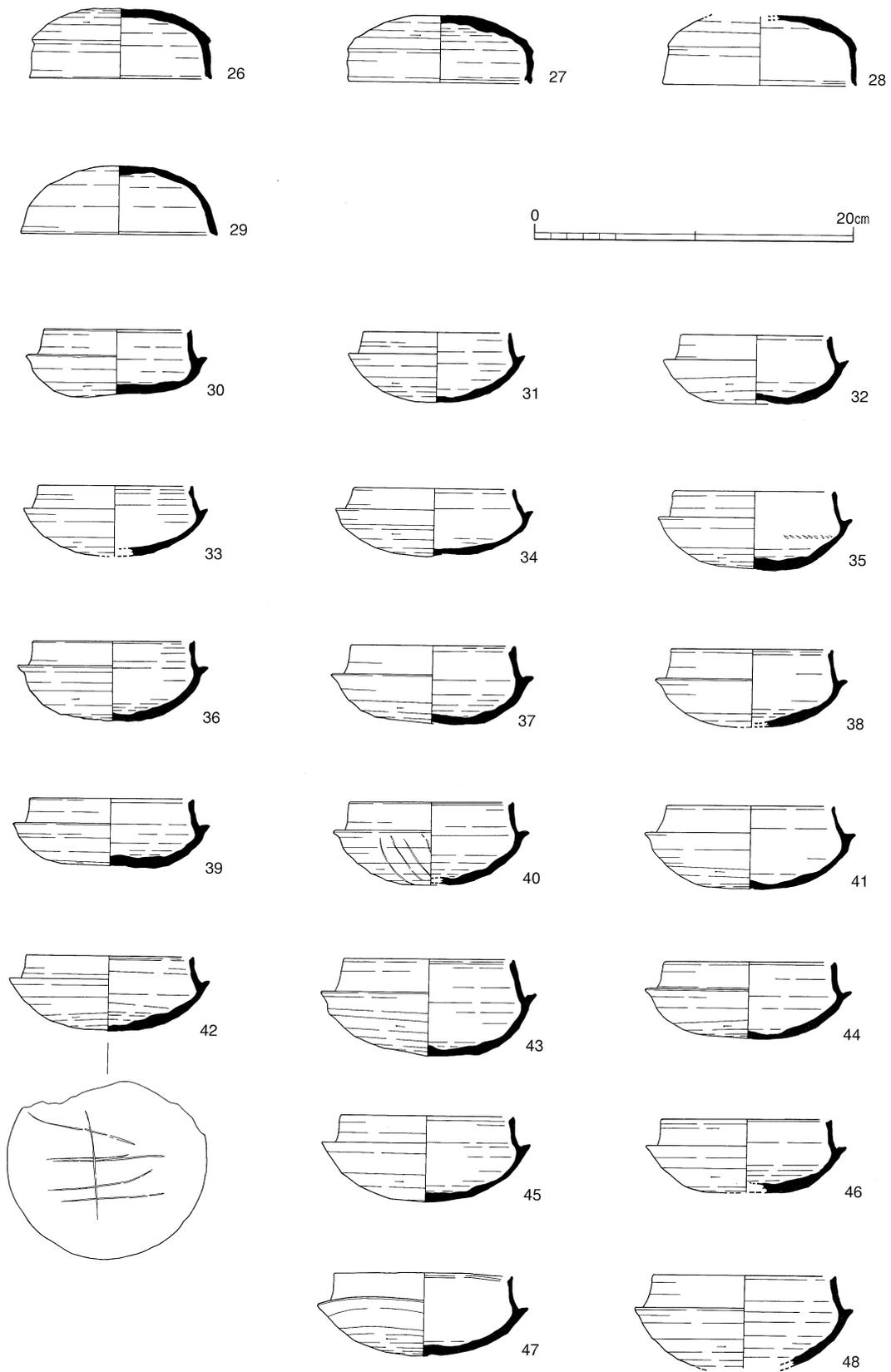
高杯（第28図49～55） 身部は有蓋（53）、無蓋（49～51）ともに出土しており、有蓋タイプの身部は杯身を転用したものであるのに対し、無蓋タイプの身部は口縁部が外半し外面に波状文を施すなどの装飾特徴がみられる。脚部も低脚（53～55）と長脚（52）ともにみられた。短脚では長方形あるいは円形の透かしが三方に施され、長脚では長方形の透かしが四方に施されるものが出土している。51と52は同一個体とみられるが、形態的な特徴からみて他の高杯よりも時期が降ることが考えられる。いずれにせよ土坑1出土の高杯は全体的に低脚タイプが主体であり、先述の杯蓋・杯身とほぼ同時期の所産とみられる。

瓶類（第27図56） 56は提瓶あるいは横瓶の口縁部であろうか。口縁部径6.3cmをはかり、端部外面に平坦面を有する。なお今回図化していないが、土坑1からは瓶類の把手も少量出土し

2. 調査の成果



第26図 土坑1出土遺物(その1) (1:4)



第27図 土坑1 出土遺物(その2) (1:4)

## 2. 調査の成果

ている。

甕（第28図57） 外反する頸部から段をなし、さらに外反する口縁部を有することが考えられるため、口縁部径は胴部最大径を超えるものとみられる。残存高9cmであり、頸部に波状文、胴部最大径部に櫛描列点文が巡る。

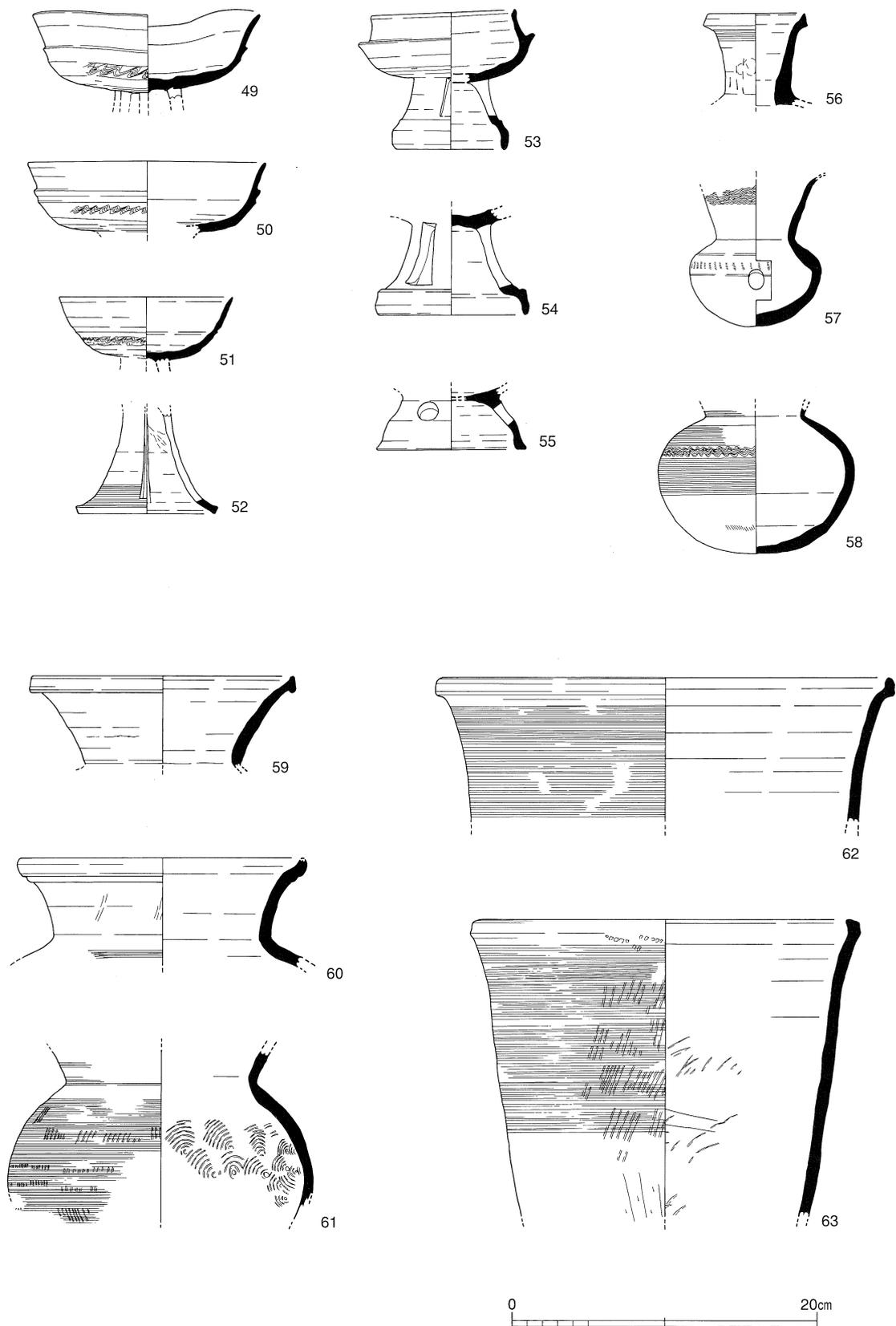
壺（第28図58・59） 58は体部のみの残存であったが、直口壺あるいは長頸壺の一種としての可能性が考えられる。頸部～体部上半部にはカキ目が施され、その合間に波状文が巡る。59は広口壺の口縁部であろう。傾きに若干疑問を残すが復元口縁部径17.1cmをはかり、口縁部に向かって大きく外反する形態を有する。内外面ともに回転ナデによる仕上げである。

甕（第28図60～62） 60・61は小～中形の甕に相当しよう。60の口縁部片は頸部～口縁部にかけて内外面ともに回転ナデによる仕上げである。61は頸部～体部片であり、体部外面は平行タタキの後にカキ目調整がなされる。62は復元口縁部径が29cmに達することから中～大形品になるものとみられる。頸部全体に回転ナデの後にカキ目が施される。今回図化し得た甕は3点にとどまるが、この他に土坑1では大甕の口縁部、体部片が大量に出土していることから、実際はかなりの個体数にのぼるものと考えられる。これらの体部片は、外面に平行タタキ目またはタタキの後にカキ目または擦り消しが施され、内面は当て具（同心円文）の痕跡を明瞭に残すものが主である。

甌（第28図63） 復元口縁部径23.8cm、残存高19.7cmをはかり、口縁部に向かって外開きの形態である。底部形態、および把手の有無は不明である。外面は上半部は平行タタキの後にカキ目、同下半部はケズリが施され、内面は主にタタキの後ナデによる調整がなされる。なお今回図化していないが、土坑1からは甌の把手部分も少量出土している。ただし第28図63に伴うものであるかは不明である。

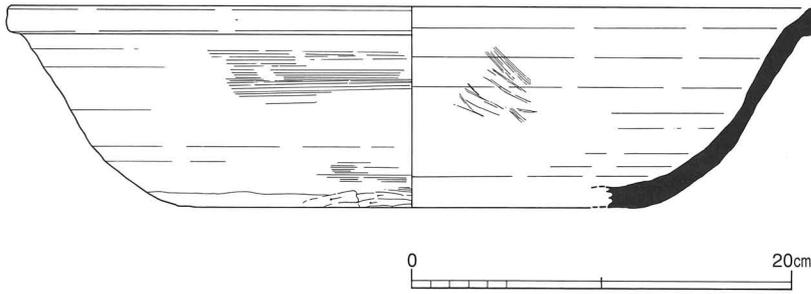
鉢（第29図） 調査では包含層南東部出土であったが、土坑1検出時点ですでにみえていたため、土坑1出土遺物として報告する。当該須恵器は他に大形器台の受け部である可能性も推定されたが、底部外面に脚部を有していた痕跡がみとめられなかったため大形の鉢と判断した。復元口縁部径42.2cm、残存高10.8cmをはかり、静止ヘラケズリによって安定した平底が形成される。外面の上半部にはカキ目が施される。

今回土坑1出土遺物の中心である須恵器について、完形品または一個体としてカウント可能な破片を対象に器種ごとの個体数の把握を試みた。ただし、算出された個体数はあくまで概算かつ土坑1全体の一部に過ぎず、各器種の大まかな出土傾向を知るための目安に過ぎないことをことわっておく。カウント可能な須恵器の総数は126点を数え、器種別の内訳は須恵器杯身50（40%）、杯蓋45（36%）、甕9（7%）、高杯7（5.5%）、甌4（3%）、壺3（2.4%）、甗2（1.6%）、瓶類2（1.6%）、鉢2（1.6%）、器台2（1.6%）といった具合であった。まず目に付くのは杯身・杯蓋の多さであり、合計の95点は全体の4分の3強（76%）を占めている。その他は高杯、甕の出土がやや目立つ以外は各器種ともごく少量の出土比率に過ぎない。杯身、杯



第28図 土坑1出土遺物(その3) (1:4)

2. 調査の成果

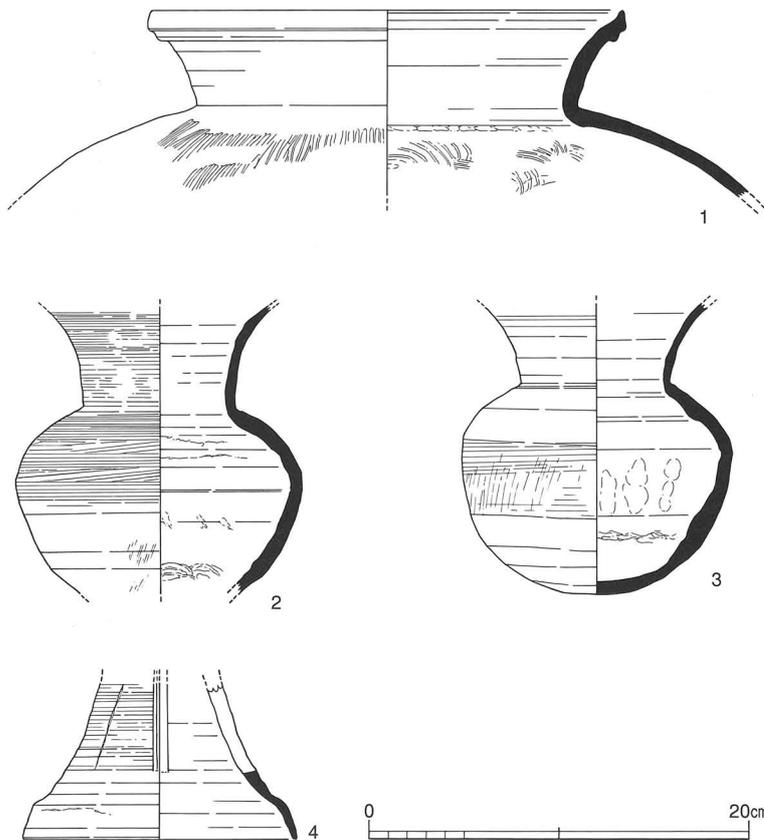


第29図 土坑1出土遺物(その4) (1:4)



第30図 土坑2遺物出土状況(東から)

土坑2 調査区北側で検出した。平面形は東西約70cm、南北50cm程度の楕円形で、最深部で20cm程度の深度を有する。埋土は暗褐色シルトの単一層であり、ベースブロック、炭粒を少量含むものであった。土坑2のほぼ中央部分では基底面からやや浮いた位置で須恵器がまとまって出土した(第30図)。底部または口縁部を欠損した須恵器壺の中から別個体の



第31図 土坑2出土遺物 (1:4)

蓋が出土器種の過半数を占める状況は、他の調査地点における廃棄土坑と同様の出土状況でもあり、土坑1が廃棄土坑であることを補強する結果であると考ええる。

須恵器や土師器碎片が入り交じった状態で出土しており、これらの出土状況は単なる廃棄ではなく人為的な所産であった可能性も否定できない。出土した須恵器の特徴から土坑2は6世紀初頭前後以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物(第31図)図化できたのは4点であった。2・3は須恵器壺である。3は頸部の一部ならびに口縁部を欠損しているが広口壺あるいは直口壺であろう。胴部外面は平行

タタキの後に横ナデを行う。2は口縁部と底部を欠損しているが広口壺とみられ、頸部～胴部上半部にわたってカキ目が施される。4は壺あるいは高杯の脚部とみられ、復元底部径14.4cm、残存高8.3cmをはかる。復元すると長脚かつ長方形の透かしが四方向に施される形態になるものとみられる。1は復元口縁径25cmをはかる大甕口縁部である。

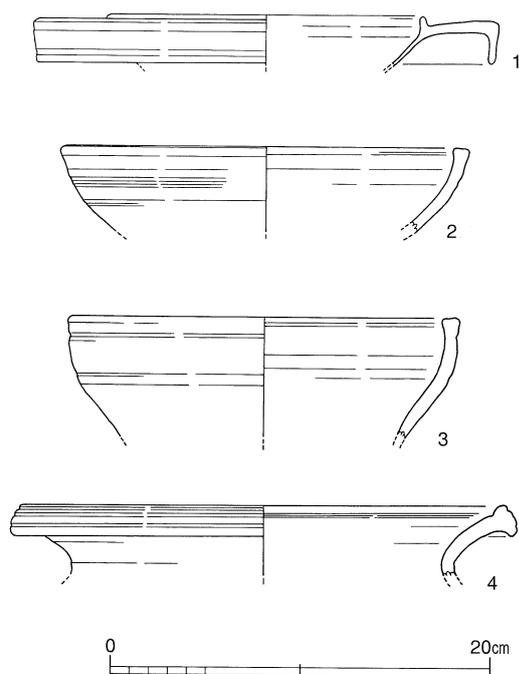
**土坑3** 調査区中央部で検出した。南西から北東方向に長軸を有する長楕円形の平面を呈する。検出最大幅0.95m、0.24mの深度を有する。埋土はにぶい黄褐色シルトの単一層であり、直径2cm程度のベースブロックを若干含むものである。基底面付近を中心に弥生土器片が出土した。土坑3は後述する出土遺物（第32図1～4）の特徴からみて、弥生時代中期後葉以前に機能していたものと考えられる。

**出土遺物（第32図1～4）** 埋土中からは弥生土器が出土した。1・2はそれぞれ高杯口縁部であろう。1はいわゆる水平口縁部の形態を有するもので、端面に2条の凹線が巡る。復元口縁部径は16.4cmをはかる。2は傾きに若干疑問を残すが杯部が椀状を呈するタイプとみられる。復元口縁部径は21.5cmをはかる。いずれも弥生時代中期後葉の所産であろう。

3は有段口縁壺の口縁部片とみられるが、小片のため詳細は不明である。復元口縁部径は20.2cmをはかり、外面には少なくとも2条の凹線が巡る。口縁端部は内外にやや肥厚気味であり、口縁部から頸部へはゆるやかに移行する。4は広口壺の口縁部とみられ、口縁部端部が上下に伸びる形態を呈する。復元口縁部径は25cm、残存高3.75cmをはかる。端部外面には少なくとも3条の凹線が施される。これらの遺物は概ね弥生時代中期後葉の時期に比定されよう。

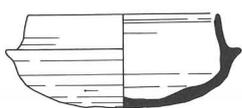
**土坑12** 調査区北東部で検出した。土坑の正確な規模・平面形は大部分が調査区外に伸びていることが考えられるため不明であるが、南北3.8m以上、東西1.3m以上の規模が考えられ、深度は検出面から約0.2mをはかる。埋土は褐色シルトの単一層であり、埋土中からは須恵器を中心に土師器、弥生土器碎片などが出土した。なお出土須恵器中には、重ね焼き時に別個体の杯身が融着した杯身や、窯壁の一部が融着した提瓶など明らかに不良品であったとみてよい須恵器が複数含まれていた。出土須恵器（第33図）の形態的な特徴から、当該土坑は6世紀初頭前後以降に形成され、その後埋没したことが考えられる。

**土坑13** 調査区北側で検出した不整形の土坑である。検出時の東西幅は3.2m以上、南北幅3.7m以上に達し、5～8cm程度の深度を有していた。ただし土坑13はベースがやや凹んだ範囲に



第32図 土坑3出土遺物（1：4）

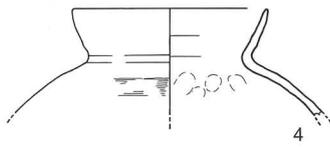
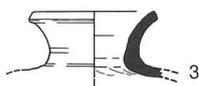
## 2. 調査の成果



第33図 土坑12  
出土遺物(1:4)



第34図 土坑14遺物出土状況(東から)



第35図 包含層出土遺物(1:4)

遺物包含層が堆積しているだけの可能性もあり、遺構でない可能性も考えられる。出土遺物に須恵器が含まれないことから、当該土坑は須恵器出現以前、弥生時代中期～古墳時代前期の間に形成されたものと考えられる。

土坑14 周囲の遺構と重複しているため土坑の正確な輪郭は把握できなかったが、検出時は東西幅が2.2m以上、南北幅1.9m以上をは

かり、10cm程度の深度を有するものであった。東側の土坑13との重複部分はそれぞれの埋土の特徴が類似していたために、切り合い関係は断面観察によった。土坑の西側では土器片の集積がみとめられたが、いずれも碎片かつ摩滅が著しかったために図化し得ていない。出土遺物中に外面にタタキを有する甕形土器、凸レンズ状の底部片などが含まれていた。これらの遺物は

弥生時代後期～終末期頃のものとみられることから、土坑14の形成時期も同様の所産が考えられる。

包含層出土遺物(第35図) 今回は遺物包含層からも遺物が多数出土しているが、図化に耐えうる遺物は土師器、須恵器合わせて4点であった。

1～3はいずれも調査区南東部、つまり土坑1直上とその付近からの

出土であったため、土坑1に帰属する須恵器であった可能性が考えられる。1・2の杯身は口縁部径がそれぞれ10.8cm、10.4cmをはかり、形態的にも土坑1出土の杯身と特徴が共通している。3は瓶類(提瓶または横瓶か)の口縁部であろう。

4は調査区北側、竪穴住居1周辺出土の土師器甕である。口縁部の傾きに若干疑問を残すが復元口縁部径10.2cmをはかり、球形の体部を有することが考えられる。内外面ともに摩滅が著しく調整はわかりづらいが内面でわずかに確認できるヘラケズリや、口縁部の形態的な特徴から須恵器が共伴する段階の所産であった可能性が考えられる。

この他に図化し得てないが多数の須恵器に混じって弥生時代中期、後～終末期の土器碎片、7～8世紀代頃の須恵器杯蓋片も微量ながら出土している。よって当該遺物包含層は弥生～古墳時代を主体としつつも8世紀代までにわたって形成されたことが考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では弥生時代中期、弥生時代後～終末期、古墳時代後期初頭前後、および中世の遺構を検出したが、特に古墳時代後期初頭前後の土坑1からは良好な一括資料が得られ、新免遺跡における廃棄土坑の事例が一つ追加されることとなった。以下では古墳時代の調査成果を中心に、弥生時代の成果についても若干触れておきたい。

古墳時代の遺構について 検出された遺構は後期初頭前後が主であったが、ここでは土坑1を中心にその成立背景について考えてみたい。新免遺跡をはじめ、本町遺跡、柴原遺跡など千里川流域の古墳時代集落で検出されている須恵器廃棄土坑は概ね5世紀末～6世紀中葉頃(TK47～TK10型式)の投棄が推定されているが、土坑1はこれらの廃棄土坑のなかでは初現期に属することが明らかになった。また他の廃棄土坑と同様に生焼けや焼け歪みなど焼成不良の須恵器が一定量含まれることから、これらの須恵器が千里川上流域一帯に展開した桜井谷窯跡群で焼成されたものであることが推察される。

一般に桜井谷窯跡群における須恵器生産は6世紀前～中葉にピークを迎えることが知られている。新免遺跡の各地点で検出された廃棄土坑は、土坑1も含めてほぼ5世紀末～6世紀前葉に収まっており、いわば桜井谷窯跡群における須恵器生産が開始し最盛期にさしかかる頃までの所産であることがうかがえる。よって土坑1は桜井谷窯跡群における須恵器生産の初期段階に関連する資料として位置付けることが可能ではないだろうか。よって土坑1出土須恵器の大半は、すでに指摘されている通り、窯跡群から運び出す段階での選別(一次選別)を経た後に千里川経由で新免遺跡に運び込まれ、ここで最終的に使用可能品のみが選別(二次選別)された結果として廃棄された一群であったことが考えられる。ただし完形品も含まれていることから、集落で実際に使用されたものもかなり含まれていたであろう。

弥生時代の遺構について 今回の調査地周辺で実施された第15次、44次調査では調査面積が狭小にもかかわらず弥生後～終末期の遺構・遺物が、さらに第15次調査では弥生中期後葉頃の遺物が出土していることから、調査地一帯に弥生中期、後～終末期頃の集落が展開していたことが改めて確認された。弥生集落としてみた場合、弥生中期の新免集落は府内でも屈指の広大な領域を有しており、集落内に居住域と墓域がセットになっていくつかのグループを形成していたことが考えられている。新免遺跡で確認されている周溝墓の多くは一辺が5mに満たない中小規模に属しており、単独でなくむしろ群をなすことが一般的である。今回周辺の調査地においても明確な方形周溝墓を確認しておらず、墓域を示すような検出状況、および遺物の出土状況がみとめられなかったため、調査地一帯は墓域ではなく居住域の一角であったものと考えたい。

以上、今回の調査成果は遺跡全体からみると断片に過ぎないためあくまで見通しに過ぎない。よって今後の周辺における調査成果の蓄積が待たれる。

### 3. まとめ

#### 【参考・引用文献】（順不同）

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団・豊中市教育委員会 『新免遺跡－第11次発掘調査報告書－』豊中市文化財調査報告第22集 1987

山元 建 「須恵器生産の始まりと集落－大阪府千里古窯跡群と新免遺跡－」『研究紀要』3  
大阪府埋蔵文化財協会 1995

少路窯跡遺跡調査団 『桜井谷2－17号窯跡』豊中市文化財調査報告第9集 1982

## 第VI章 確認調査の成果

### 確認調査の概要

今年1月から12月までの間に個人住宅を対象に行なった確認調査は52件を数え、昨年度15件、今年度37件という内訳である。このうち、10件の調査で遺構等が確認され、うち3件については協議の結果、新免遺跡第59・60次調査及び上津島遺跡第7次調査として本格的な発掘調査を行うこととなった。

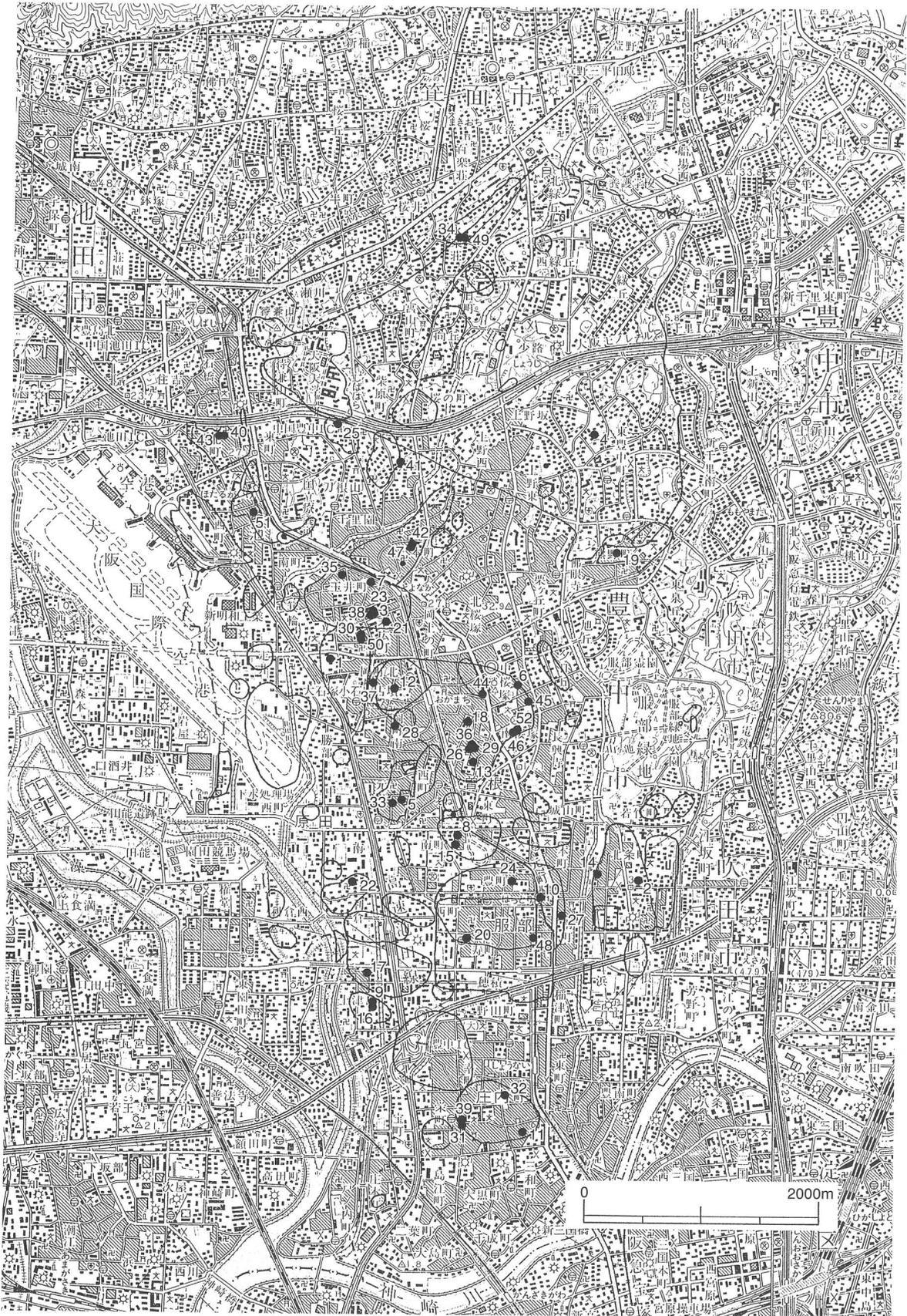
以下、今年行われた確認調査の概要について報告する。第36図に掲載した調査地点位置図の各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表 確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積 (㎡)	遺構の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	山ノ上遺跡	山ノ上町24-12	20040108	個人住宅建設	42.93	無	着工	陣内	
2	小曾根遺跡	北条町3丁目119-9	20040113	個人住宅建設	35.84	未確認	着工	陣内	
3	新免遺跡	末広町1丁目116-9	20040113	個人住宅建設	81.56	無	着工	陣内	
4	桜井谷窯跡群	東豊中町1丁目60-22	20040212	個人住宅建設	144.05	無	着工	陣内	
5	原田遺跡	原田元町2丁目198,198-1	20040212	共同住宅建設	93.95	有	再立会后、慎重工事	陣内	計画変更
6	桜塚古墳群	中桜塚4丁目91-1	20040219	個人住宅建設	138.53	無	着工	橋田	
7	新免遺跡	玉井町1丁目247-2	20040219	個人住宅建設	144.92	有	本調査(新免59次)	橋田	
8	豊島北遺跡	曾根南町1丁目86-8,87-17の一部	20040226	個人住宅建設	78.46	無	着工	橋田	
9	上津島南遺跡	上津島2丁目198-2,3	20040226	個人住宅建設	122.21	可能性有	慎重工事	橋田	
10	穂積遺跡	服部元町1丁目58-2,59	20040226	個人住宅・店舗建設	113.02	無	着工	橋田	
11	庄内遺跡	庄内西町5丁目40-1,3	20040304	個人住宅兼事務所建設	74.34	未確認	着工	陣内	
12	岡町北遺跡	岡町北1丁目43-4	20040304	個人住宅建設	51.34	無	着工	陣内	
13	桜塚古墳群	南桜塚1丁目159-3	20040304	個人住宅建設	68.19	無	着工	陣内	
14	小曾根遺跡	北条町1丁目51-5	20040311	個人住宅建設	32.17	未確認	着工	陣内	
15	豊島北遺跡	曾根南町1丁目89-7,91-3,92-3	20040325	個人住宅建設	73.02	無	着工	清水	
16	上津島南遺跡	今在家町192-3	20040401	倉庫建設	38.22	未確認	着工	陣内	
17	上津島遺跡	上津島2丁目123-17	20040408	個人住宅建設	56.88	有	本調査(上津島7次)	橋田	
18	桜塚古墳群	中桜塚1丁目166	20040513	個人住宅建設	87.51	無	着工	服部	
19	熊野田遺跡	熊野町4丁目18-2,3	20040527	個人住宅建設	88.19	有	着工	橋田	19世紀の遺構検出
20	穂積遺跡	服部寿町3丁目1407-2,3の一部	20040617	個人住宅建設	43.74	未確認	慎重工事	陣内	
21	新免遺跡	末広町1丁目60-10	20040624	個人住宅建設	132.20	無	着工	陣内	
22	利倉遺跡	利倉2丁目825,825-1	20040624	個人住宅建設	98.97	有	慎重工事	橋田	基礎深度浅
23	新免遺跡	末広町1丁目116-5	20040701	個人住宅建設	94.29	無	着工	陣内	
24	穂積遺跡	服部豊町1丁目72-2	20040701	個人住宅建設	137.59	未確認	着工	陣内	
25	北刀根山遺跡	刀根山元町225-2	20040708	個人住宅建設	54.65	未確認	着工	清水	
26	桜塚古墳群	南桜塚1丁目123-5	20040708	個人住宅建設	55.07	無	着工	清水	
27	穂積遺跡	服部南町2丁目60の一部	20040708	個人住宅建設	46.19	無	着工	清水	
28	岡町南遺跡	岡町南2丁目18-20	20040722	個人住宅建設	92.00	無	着工	陣内	
29	桜塚古墳群	南桜塚1丁目123-9	20040729	個人住宅建設	115.93	無	着工	橋田	
30	山ノ上遺跡	立花町2丁目94-2	20040729	個人住宅建設	54.45	可能性有	着工	橋田	
31	庄内遺跡	庄内幸町4丁目58-2	20040805	個人住宅建設	74.14	無	着工	清水	

確認調査の概要

32	庄内遺跡	庄内西町3丁目91	20040812	個人住宅建設	67.89	無	着工	橘田	
33	原田遺跡	原田元町2丁目167-3	20040812	個人住宅建設	56.70	有	再立会后、慎重工事	橘田	基礎深度浅
34	太鼓塚古墳群	永楽荘2丁目255-2	20040812	個人住宅建設	63.24	無	着工	橘田	
35	新免遺跡	玉井町2丁目196-2	20040819	個人住宅建設	108.00	有	本調査(新免60次)	橘田	
36	桜塚古墳群	南桜塚1丁目123-3,4,7,8	20040902	個人住宅建設	227.95	無	着工	橘田	
37	岡町北遺跡	岡町北2丁目66-24	20040909	個人住宅建設	74.87	有	慎重工事	清水	基礎深度浅
38	新免遺跡	未広町1丁目119-7,8	20040909	個人住宅建設	64.21	無	着工	清水	
39	庄内遺跡	庄内幸町4丁目18-2	20040913	個人住宅建設	50.81	無	着工	橘田	
40	蛭池北遺跡	蛭池北町1丁目138の一部	20040917	個人住宅建設	50.62	有	再立会后、着工	橘田	計画変更
41	柴原遺跡	柴原町1丁目27-10	20040924	個人住宅建設	51.06	無	着工	清水	
42	本町遺跡	本町4丁目73-1,74-1の各一部	20040924	個人住宅建設	50.51	未確認	着工	清水	
43	蛭池北遺跡	蛭池北町1丁目138	20040930	個人住宅建設	59.62	可能性有	再立会后、着工	橘田	計画変更
44	岡町遺跡	中桜塚2丁目377	20041007	個人住宅建設	57.02	無	着工	陣内	
45	桜塚古墳群	南桜塚3丁目73-1	20041028	個人住宅建設	64.13	無	着工	陣内	
46	桜塚古墳群	南桜塚2丁目58	20041111	個人住宅建設	128.11	無	着工	清水	
47	本町遺跡	本町4丁目74-1	20041125	個人住宅建設	57.55	未確認	着工	橘田	
48	穂積遺跡	服部寿町1丁目689-10	20041202	個人住宅建設	56.44	無	着工	陣内	
49	太鼓塚古墳群	永楽荘2丁目255	20041209	個人住宅建設	80.11	無	着工	橘田	
50	山ノ上遺跡	立花町2丁目94-4	20041209	個人住宅建設	53.46	無	着工	橘田	
51	麻田藩陣屋跡	蛭池中町2丁目79	20041209	個人住宅建設	61.77	有	再立会后、着工	橘田	計画変更
52	桜塚古墳群	南桜塚2丁目57-3	20041216	個人住宅建設	55.37	無	着工	陣内	



第36図 調査地点位置図 (1 : 50,000)

## 2004-01 山ノ上遺跡

調査日：平成16年（2004年）1月8日

調査場所：豊中市山ノ上町24-12

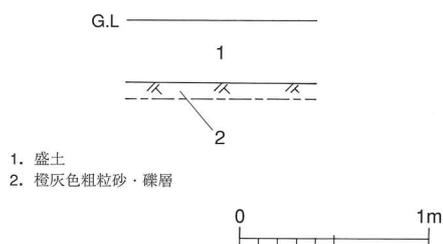
調査対象面積：42.93m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第37図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下33cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第38図 トレンチ断面図

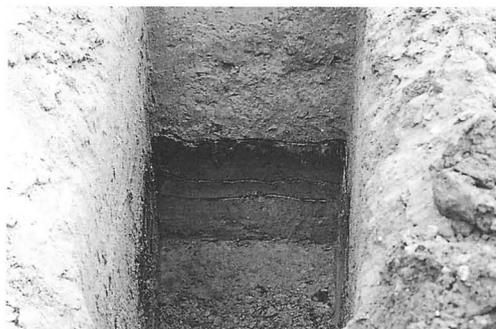
## 2004-02 小曾根遺跡

調査日：平成16年（2004年）1月13日

調査場所：豊中市北条町3丁目119-9

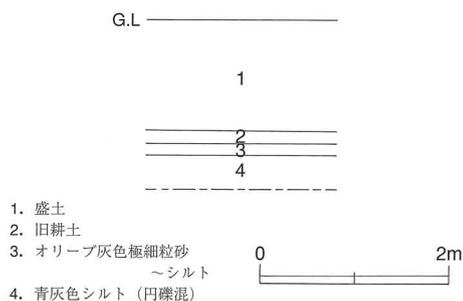
調査対象面積：35.84m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第39図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下180cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第40図 トレンチ断面図

### 2004-03 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）1月13日

調査場所：豊中市末広町1丁目116-9

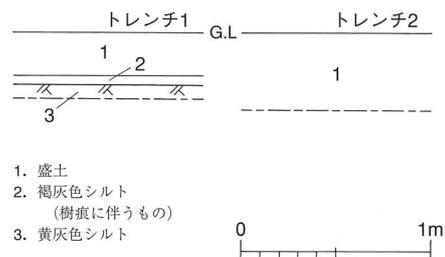
調査対象面積：81.56m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第41図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1では地表下28cmにおいて基盤層を検出し、トレンチ2では地表下41cmまで掘削したが、遺構・遺物等は確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第42図 トレンチ断面図

### 2004-04 桜井谷窯跡群

調査日：平成16年（2004年）2月12日

調査場所：豊中市東豊中町1丁目60-22

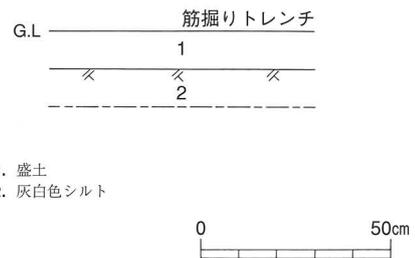
調査対象面積：144.05m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第43図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下10cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第44図 トレンチ断面図

### 2004-05 原田遺跡

調査日：平成16年（2004年）2月12日

調査場所：豊中市原田元町2丁目198,198-1

調査対象面積：93.95m<sup>2</sup>

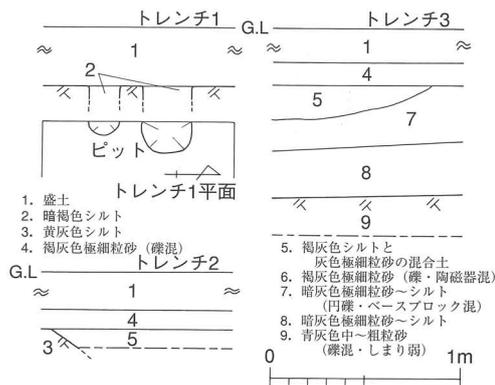
調査の方法：重機によりトレンチ3カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下51cmにおいてピットを検出、トレンチ2では地表下70cmにおいて基盤層が東側に落ち込んでいくのを確認し、トレンチ3では基盤層が地表下140cmにまで達することが確認された。

調査後の処置：計画変更により、再立会の上、慎重工事を指示。



第45図 トレンチ掘削状況



第46図 トレンチ平面・断面図

### 2004-06 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）2月19日

調査場所：豊中市中桜塚4丁目91-1

調査対象面積：138.53m<sup>2</sup>

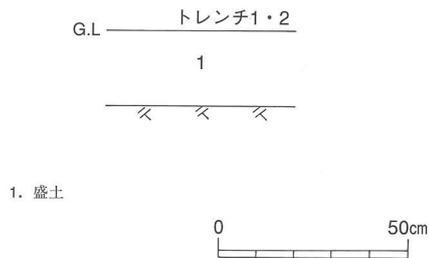
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第47図 トレンチ掘削状況



第48図 トレンチ断面図

### 2004-07 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）2月19日

調査場所：豊中市玉井町1丁目247-2

調査対象面積：144.92m<sup>2</sup>

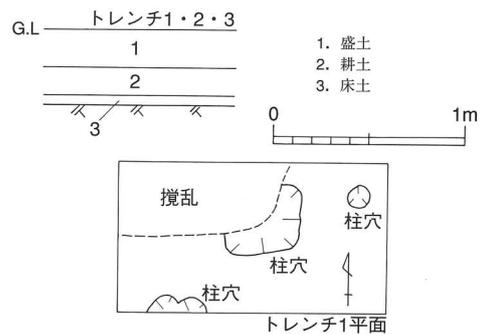
調査の方法：重機によりトレンチ3カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下40cmにおいて柱穴を検出、トレンチ2・3では地表下40cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。  
(新免遺跡第59次調査)



第49図 トレンチ掘削状況



第50図 トレンチ平面・断面図

### 2004-08 豊島北遺跡

調査日：平成16年（2004年）2月26日

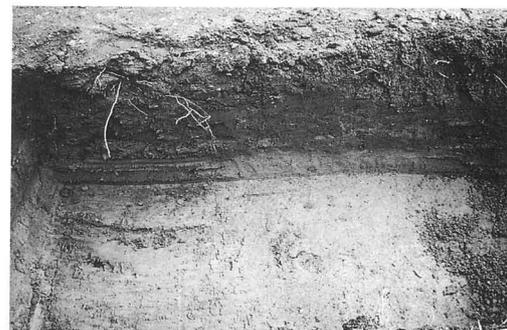
調査場所：豊中市曾根南町1丁目86-8,87-17の一部

調査対象面積：78.46m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下100cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第51図 トレンチ掘削状況



第52図 トレンチ断面図

## 2004-09 上津島南遺跡

調査日：平成16年（2004年）2月26日

調査場所：豊中市上津島2丁目198-2,3

調査対象面積：122.21m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下15～30cmにおいて少量の遺物を確認したが、掘削深度（地表下120cm）内では明確な遺構は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、慎重工事を指示。



第53図 トレンチ掘削状況



第54図 トレンチ断面図

## 2004-10 穂積遺跡

調査日：平成16年（2004年）2月26日

調査場所：豊中市服部元町1丁目58-2,59

調査対象面積：113.02m<sup>2</sup>

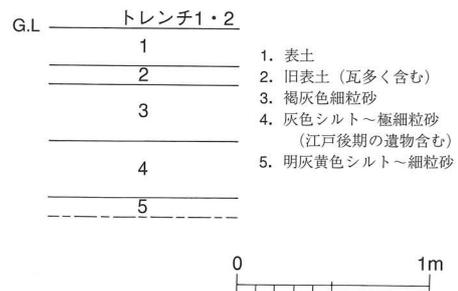
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに表土直下より江戸時代後期以降の遺物包含層を検出したが、掘削深度（地表下100cm）内では調査対象となる明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第55図 トレンチ掘削状況



第56図 トレンチ断面図

### 2004-11 庄内遺跡

調査日：平成16年（2004年）3月4日

調査場所：豊中市庄内西町5丁目40-1,3

調査対象面積：74.34m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第57図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下150cm）内においては、遺構・遺物ともに確認できなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第58図 トレンチ断面図

### 2004-12 岡町北遺跡

調査日：平成16年（2004年）3月4日

調査場所：豊中市岡町北1丁目43-4

調査対象面積：51.34m<sup>2</sup>

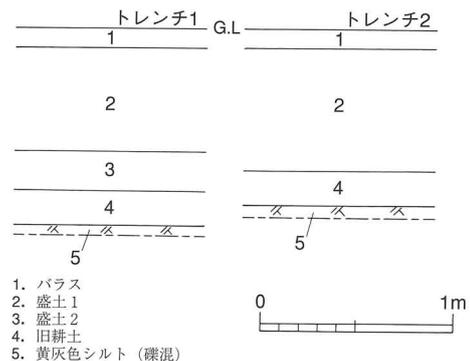
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第59図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1では地表下105cmにおいて、トレンチ2では地表下93cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第60図 トレンチ断面図

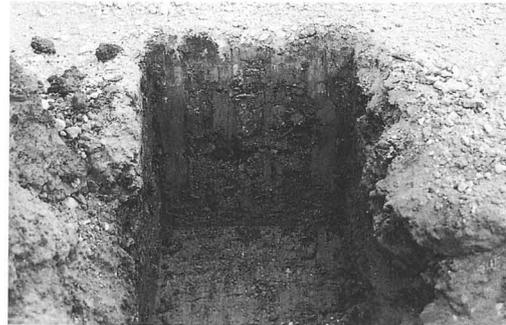
### 2004-13 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）3月4日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目159-3

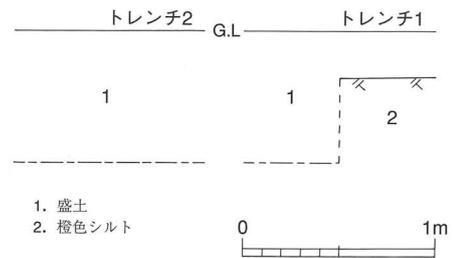
調査対象面積：68.19m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第61図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1では地表下25cmで基盤層を検出、トレンチ2では地表下70cmまで掘削したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第62図 トレンチ断面図

### 2004-14 小曾根遺跡

調査日：平成16年（2004年）3月11日

調査場所：豊中市北条町1丁目51-5

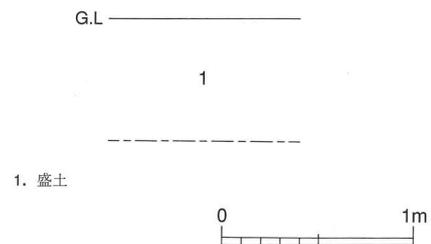
調査対象面積：32.17m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第63図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下65cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第64図 トレンチ断面図

### 2004-15 豊島北遺跡

調査日：平成16年（2004年）3月25日

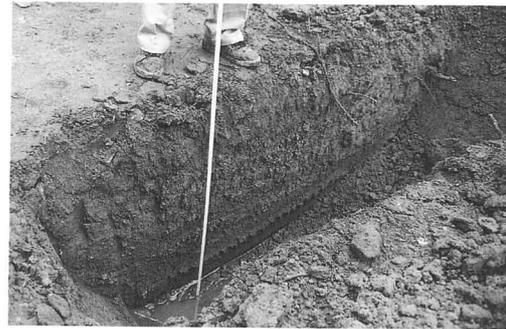
調査場所：豊中市曾根南町1丁目89-7、91-3、92-3

調査対象面積：73.02m<sup>2</sup>

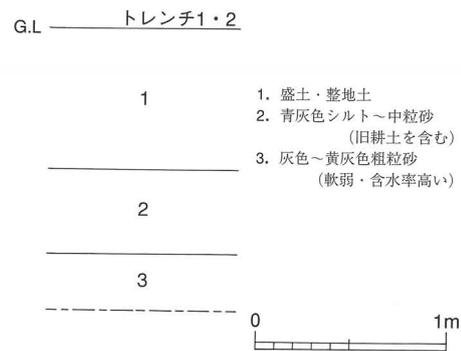
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下150cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第65図 トレンチ掘削状況



第66図 トレンチ断面図

### 2004-16 上津島南遺跡

調査日：平成16年（2004年）4月1日

調査場所：豊中市今在家町192-3

調査対象面積：38.22m<sup>2</sup>

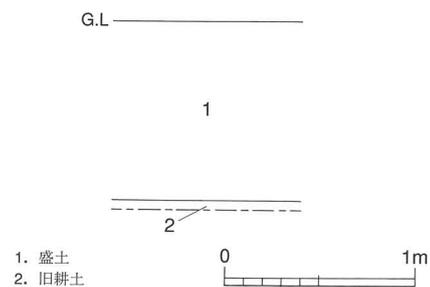
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下100cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第67図 トレンチ掘削状況



第68図 トレンチ断面図

確認調査（2004-17~20）

## 2004-17 上津島遺跡

調査日：平成16年（2004年）4月8日

調査場所：豊中市上津島2丁目123-17

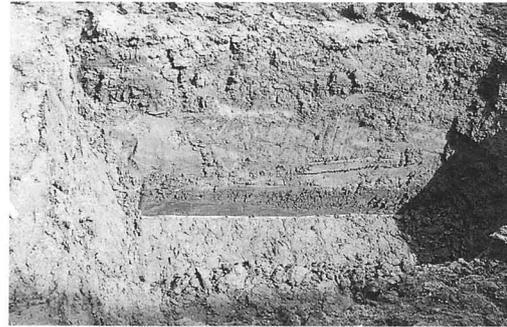
調査対象面積：56.88m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

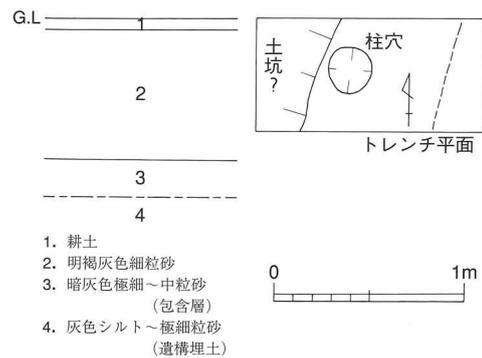
調査の概要：地表下75cmでは遺物包含層を、地表下95cmでは遺構（柱穴・土坑）を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。

（上津島遺跡第7次調査）



第69図 トレンチ掘削状況



第70図 トレンチ平面・断面図

## 2004-18 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）5月13日

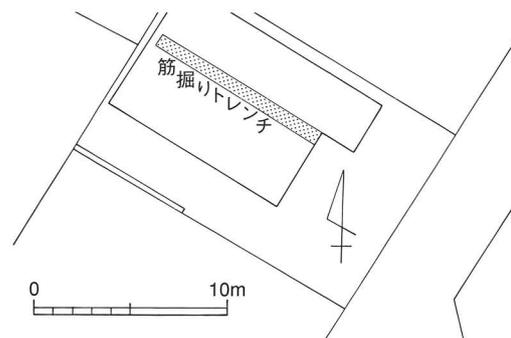
調査場所：豊中市中桜塚1丁目166

調査対象面積：87.51m<sup>2</sup>

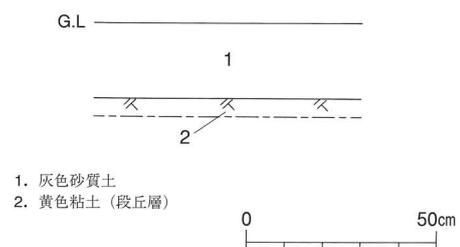
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第71図 トレンチ位置図



第72図 トレンチ断面図

### 2004-19 熊野田遺跡

調査日：平成16年（2004年）5月27日

調査場所：豊中市熊野町4丁目18-2,3

調査対象面積：88.19m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2では地表下30cmにおいては19世紀の遺構面を、地表下100cmにおいては基盤層を検出したが、調査対象となる明確な遺物・遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第73図 トレンチ掘削状況



第74図 トレンチ断面図

### 2004-20 穂積遺跡

調査日：平成16年（2004年）6月17日

調査場所：豊中市服部寿町3丁目1407-2,3の一部

調査対象面積：43.74m<sup>2</sup>

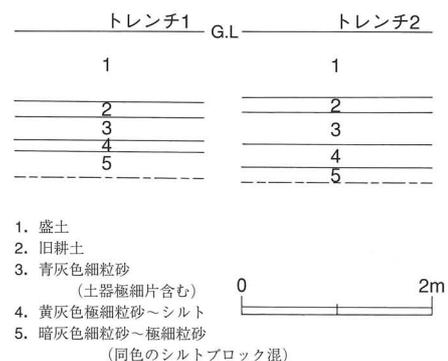
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下160cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第75図 トレンチ掘削状況



第76図 トレンチ断面図

### 2004-21 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）6月24日

調査場所：豊中市末広町1丁目60-10

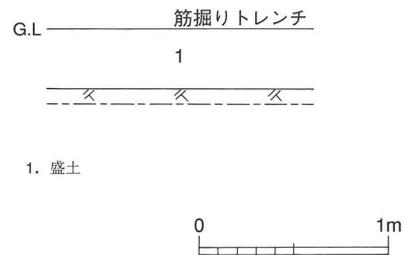
調査対象面積：132.20m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第77図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下32cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



第78図 トレンチ断面図

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

### 2004-22 利倉遺跡

調査日：平成16年（2004年）6月24日

調査場所：豊中市利倉2丁目825、825-1

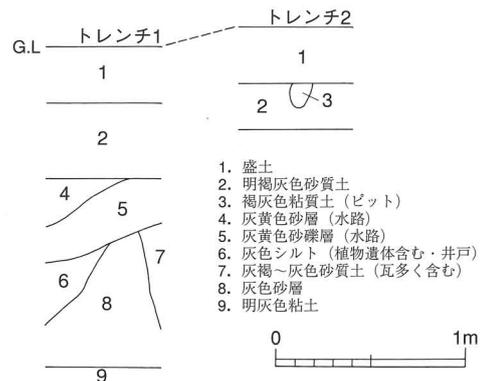
調査対象面積：98.97m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第79図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ2では地表下30cmで中～近世の遺構を、トレンチ1では地表下70cmで近世水路・井戸状の土坑（中世か？）を検出した。



第80図 トレンチ平面・断面図

調査後の処置：基礎掘削は現行地面から10cmの掘削にとどまることから、着工を指示。

### 2004-23 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月1日

調査場所：豊中市末広町1丁目116-5

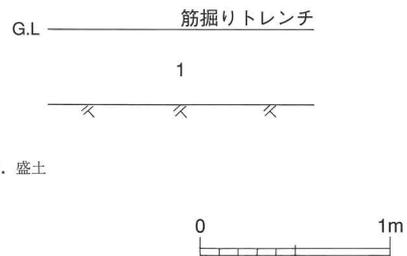
調査対象面積：94.29m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を確認し、トレンチ内を精査した。



第81図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下40cmで基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



1. 盛土

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第82図 トレンチ断面図

### 2004-24 穂積遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月1日

調査場所：豊中市服部豊町1丁目72-2

調査対象面積：137.59m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第83図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下195cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第84図 トレンチ断面図

## 2004-25 北刀根山遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月8日

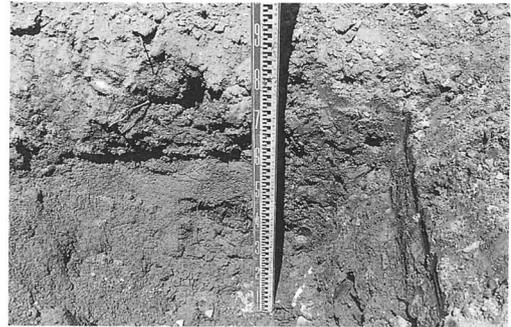
調査場所：豊中市刀根山元町225-2

調査対象面積：54.65m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下90cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第85図 トレンチ掘削状況



第86図 トレンチ断面図

## 2004-26 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）7月8日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目123-5

調査対象面積：55.07m<sup>2</sup>

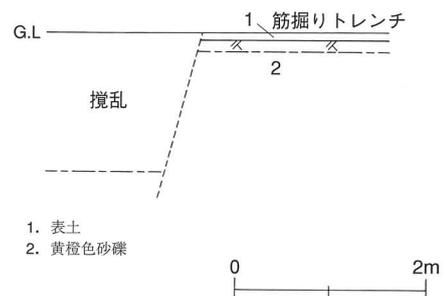
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下5cmにおいて基盤層を検出したが、攪乱を著しく受けており、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第87図 トレンチ掘削状況



第88図 トレンチ断面図

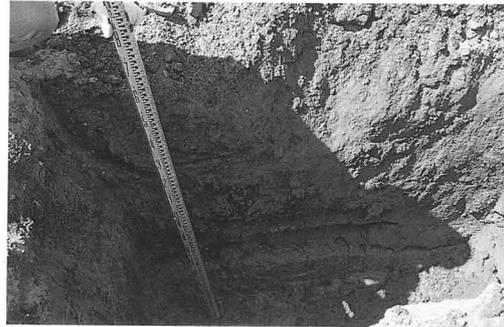
### 2004-27 穂積遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月8日

調査場所：豊中市服部南町2丁目60の一部

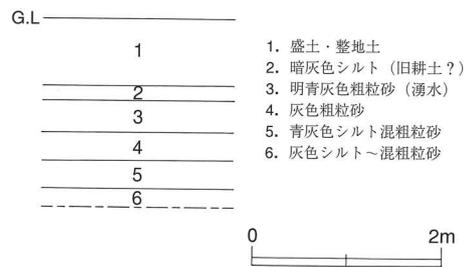
調査対象面積：46.19m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第89図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下200cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第90図 トレンチ断面図

### 2004-28 岡町南遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月22日

調査場所：豊中市岡町南2丁目18-20

調査対象面積：92.00m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第91図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1では地表下32cmにおいて、トレンチ2では地表下35cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



- 1. 盛土
- 2. 灰白色シルト
- 3. 黄灰色シルト

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第92図 トレンチ断面図

## 2004-29 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）7月29日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目123-9

調査対象面積：115.93m<sup>2</sup>

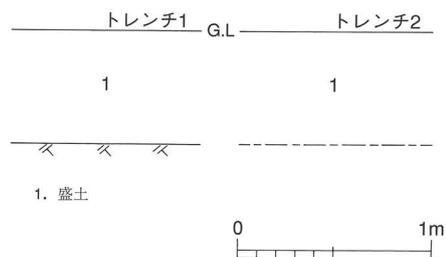
調査の方法：重機によりトレンチを各1カ所ずつを掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：各トレンチにおいて掘削深度（地表下60cm）内では、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第93図 トレンチ掘削状況



第94図 トレンチ断面図

## 2004-30 山ノ上遺跡

調査日：平成16年（2004年）7月29日

調査場所：豊中市立花町2丁目94-2

調査対象面積：54.45m<sup>2</sup>

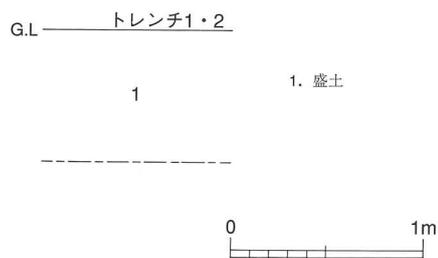
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2において小穴（ピットではない）を検出したが、その他に明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎掘削は基盤層に到達しないため、着工を指示。



第95図 トレンチ掘削状況



第96図 トレンチ断面図

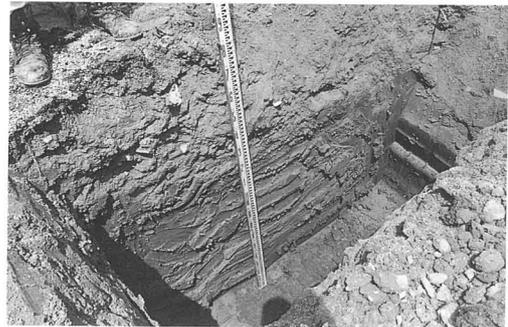
### 2004-31 庄内遺跡

調査日：平成16年（2004年）8月5日

調査場所：豊中市庄内幸町4丁目58-2

調査対象面積：74.14m<sup>2</sup>

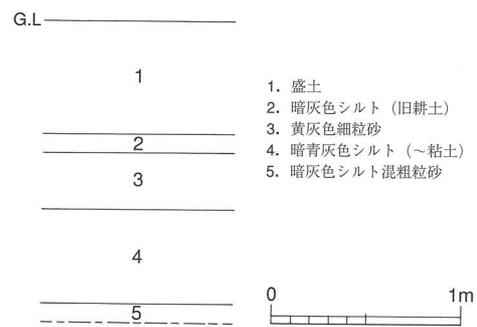
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第97図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下160cm）において、遺物・遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第98図 トレンチ断面図

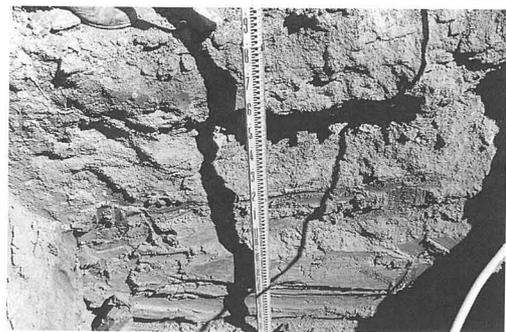
### 2004-32 庄内遺跡

調査日：平成16年（2004年）8月12日

調査場所：豊中市庄内西町3丁目91

調査対象面積：67.89m<sup>2</sup>

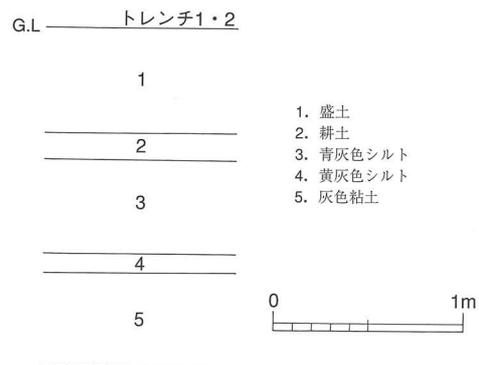
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第99図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下180cm）内では、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第100図 トレンチ断面図

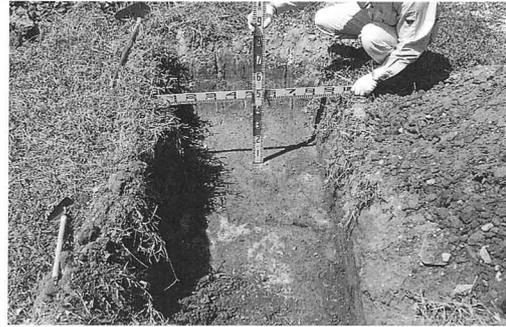
### 2004-33 原田遺跡

調査日：平成16年（2004年）8月12日

調査場所：豊中市原田元町2丁目167-3

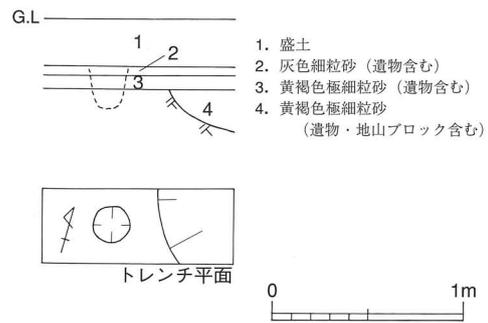
調査対象面積：56.7m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第101図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下27cm及び35cmにおいて遺構を検出した。



第102図 トレンチ平面・断面図

調査後の処置：基礎深度が盛土内に収まることから、再立会の上、慎重工事を指示。

### 2004-34 太鼓塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）8月12日

調査場所：豊中市永楽荘2丁目255-2

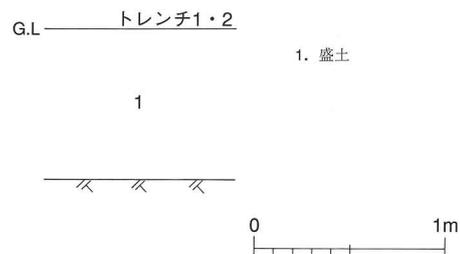
調査対象面積：63.24m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第103図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下80cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。



第104図 トレンチ断面図

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

### 2004-35 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）8月19日

調査場所：豊中市玉井町2丁目196-2

調査対象面積：108.0m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

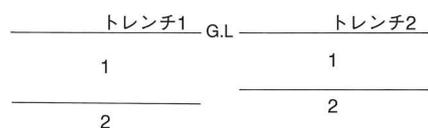
調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下30～37cmにおいて、褐灰色粘質土（遺構埋土、又は遺物包含層）を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。

（新免遺跡第60次調査）



第105図 トレンチ掘削状況



- 1. 盛土
- 2. 褐灰色粘質土（遺物含む）



第106図 トレンチ断面図

### 2004-36 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）9月2日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目123-3,4,7,8

調査対象面積：227.95m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ4カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下30cmにおいて基盤層を検出、トレンチ2・3・4では地表下30～60cmまで掘削したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第107図 トレンチ掘削状況



- 1. 盛土



第108図 トレンチ断面図

## 2004-37 岡町北遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月9日

調査場所：豊中市岡町北2丁目66-24

調査対象面積：74.87m<sup>2</sup>

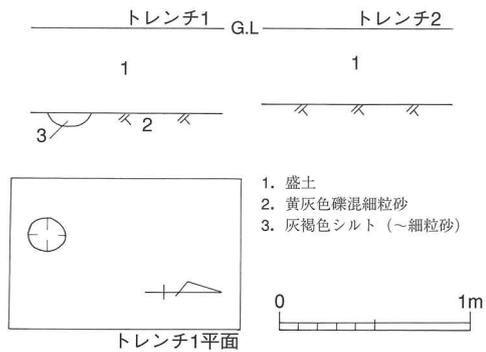
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下45cmにおいて柱穴を検出し、トレンチ2では地表下40cmにおいて基盤層を検出した。

調査後の処置：基礎深度が盛土内に収まることから、慎重工事を指示。



第109図 トレンチ掘削状況



第110図 トレンチ平面・断面図

## 2004-38 新免遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月9日

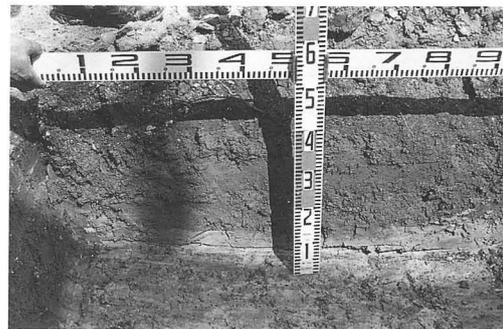
調査場所：豊中市末広町1丁目119-7,8

調査対象面積：64.21m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下25cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第111図 トレンチ掘削状況



第112図 トレンチ断面図

2004-39 庄内遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月13日

調査場所：豊中市庄内幸町4丁目18-2

調査対象面積：50.81m<sup>2</sup>

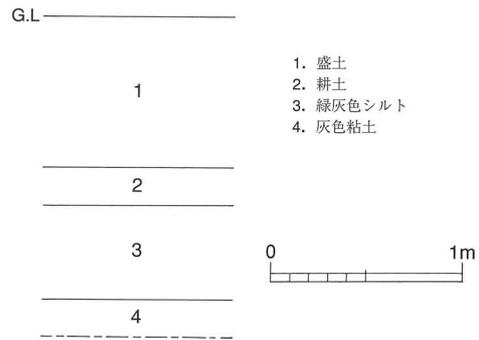
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第113図 トレンチ掘削状況

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第114図 トレンチ断面図

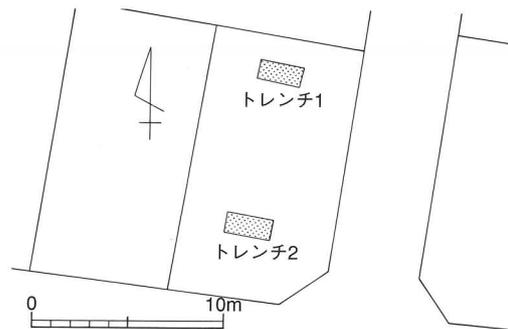
2004-40 蛍池北遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月17日

調査場所：豊中市蛍池北町1丁目138の一部

調査対象面積：50.62m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第115図 トレンチ位置図

調査の概要：トレンチ1では地表下40cmにおいて基盤層を検出し、トレンチ2では地表下23cmにおいて遺構上面を検出した。

調査後の処置：計画変更により、再立会の上、着工を指示。



第116図 トレンチ断面図

## 2004-41 柴原遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月24日

調査場所：豊中市柴原町1丁目27-10

調査対象面積：51.06m<sup>2</sup>

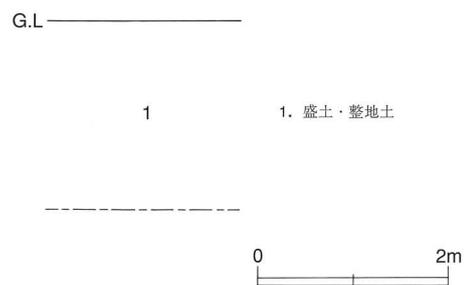
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：現況地盤下2m以上にわたって盛土がなされており、急激に落ち込む斜面地であることを確認した。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第117図 トレンチ掘削状況



第118図 トレンチ断面図

## 2004-42 本町遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月24日

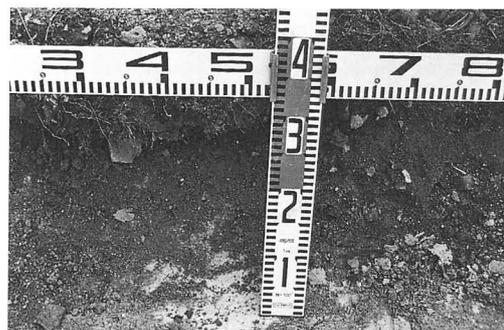
調査場所：豊中市本町4丁目73-1、74-1の各一部

調査対象面積：50.51m<sup>2</sup>

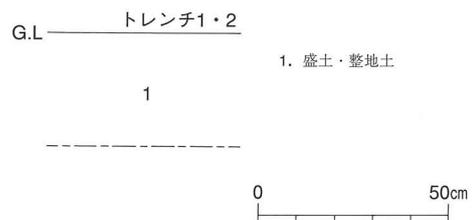
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下30cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第119図 トレンチ掘削状況



第120図 トレンチ断面図

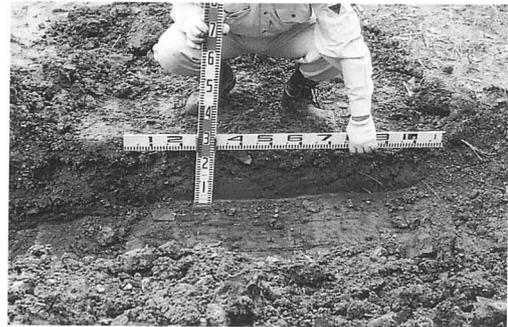
### 2004-43 蛍池北遺跡

調査日：平成16年（2004年）9月30日

調査場所：豊中市蛍池北町1丁目138

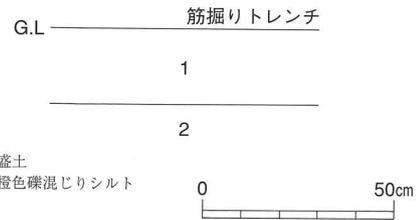
調査対象面積：59.62m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第121図 トレンチ掘削状況

調査の概要：南北トレンチの南半部において、地表下20cmで遺物包含層を検出した。



第122図 トレンチ断面図

調査後の処置：計画変更により、再立会の上、着工を指示。

### 2004-44 岡町遺跡

調査日：平成16年（2004年）10月7日

調査場所：豊中市中桜塚2丁目377

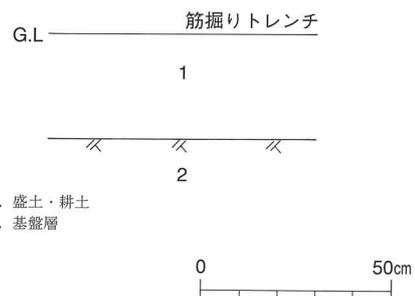
調査対象面積：57.02m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第123図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下28cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



第124図 トレンチ断面図

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

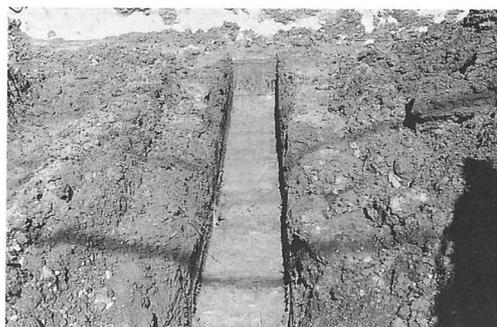
## 2004-45 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）10月28日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目73-1

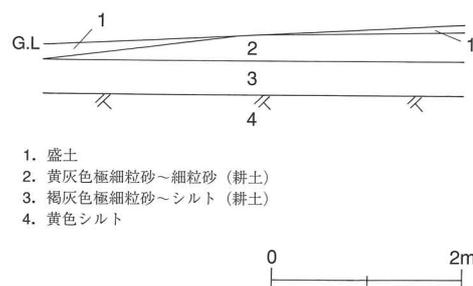
調査対象面積：64.13m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第125図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下50~75cmで基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第126図 トレンチ断面図

## 2004-46 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）11月11日

調査場所：豊中市南桜塚2丁目58

調査対象面積：128.11m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第127図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、旧建物による攪乱・削平が著しく、遺構・遺物等は確認されなかった。



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第128図 トレンチ断面図

### 2004-47 本町遺跡

調査日：平成16年（2004年）11月25日

調査場所：豊中市本町4丁目74-1

調査対象面積：57.55m<sup>2</sup>

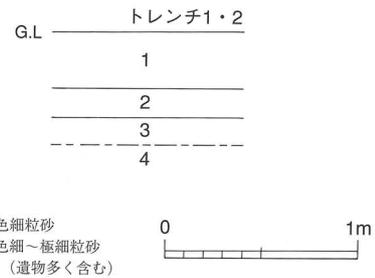
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下60cmにおいて遺物包含層を検出したが、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎深度は遺物包含層まで達しないため、着工を指示。



第129図 トレンチ掘削状況



第130図 トレンチ断面図

### 2004-48 穂積遺跡

調査日：平成16年（2004年）12月2日

調査場所：豊中市服部寿町1丁目689-10

調査対象面積：56.44m<sup>2</sup>

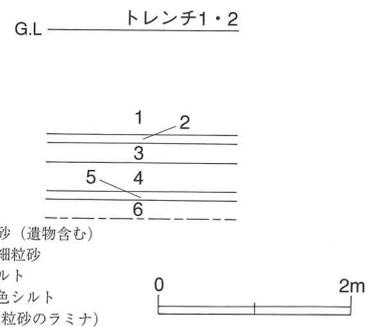
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下120cmにおいて遺物包含層を検出したが、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：遺物もまばらで遺構もないことから、着工を指示。



第131図 トレンチ掘削状況



第132図 トレンチ断面図

## 2004-49 太鼓塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）12月9日

調査場所：豊中市永楽荘2丁目255

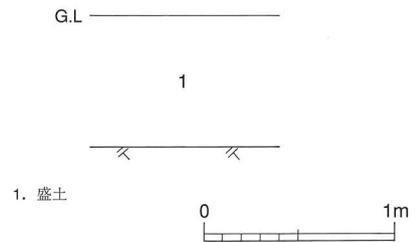
調査対象面積：80.11m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第133図 トレンチ掘削状況

調査の概要：地表下70cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。



第134図 トレンチ断面図

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

## 2004-50 山ノ上遺跡

調査日：平成16年（2004年）12月9日

調査場所：豊中市立花町2丁目94-4

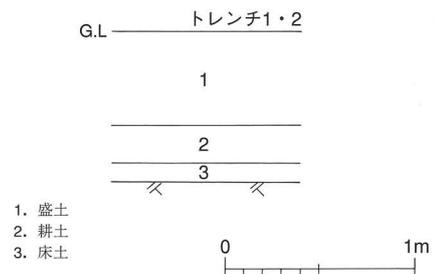
調査対象面積：53.46m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。



第135図 トレンチ掘削状況

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下80cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。



第136図 トレンチ断面図

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

## 2004-51 麻田藩陣屋跡

調査日：平成16年（2004年）12月9日

調査場所：豊中市蛭池中町2丁目79

調査対象面積：61.77m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40cmにおいて遺物包含層を、地表下60cmから遺構（礎石・溝等）を検出した。

調査後の処置：計画変更により、再立会の上、着工を指示。



第137図 トレンチ掘削状況



第138図 トレンチ断面図

## 2004-52 桜塚古墳群

調査日：平成16年（2004年）12月16日

調査場所：豊中市南桜塚2丁目57-3

調査対象面積：55.37m<sup>2</sup>

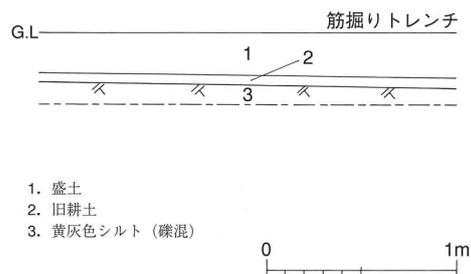
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下26～30cmにおいて基盤層を検出したが、古墳に伴う周濠及び他の遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第139図 トレンチ掘削状況



第140図 トレンチ断面図



# 版 圖





(1) トレンチ1全景



(2) トレンチ3全景



(1) トレンチ4全景



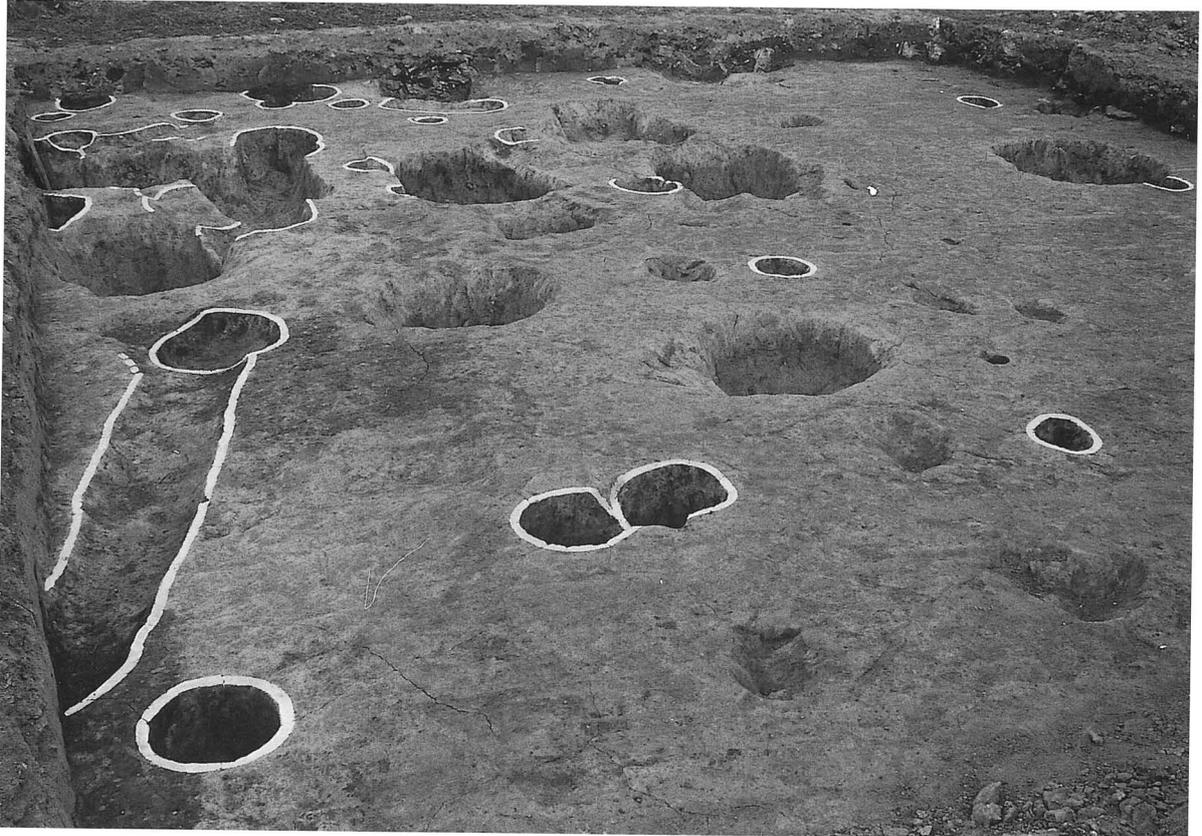
(2) トレンチ5全景



(1) トレンチ7全景



(2) トレンチ7断面



(1) 調査区東半部全景



(2) 調査区西半部全景



(1) 調査区南壁断面



(2) SP4 断面



(1) SP 6 断面



(2) SP 7 断面



(1) SP8 断面



(2) SP11 断面



(1) SP12・13断面



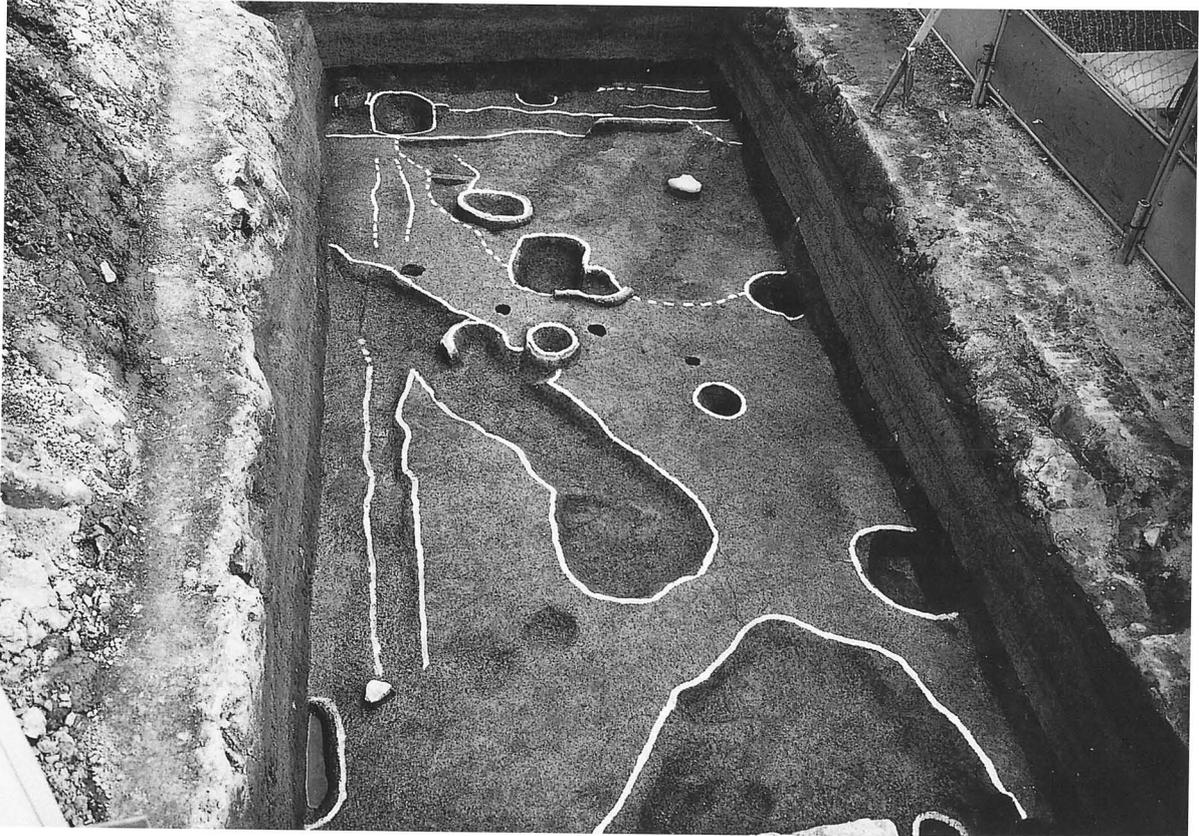
(2) SP21断面



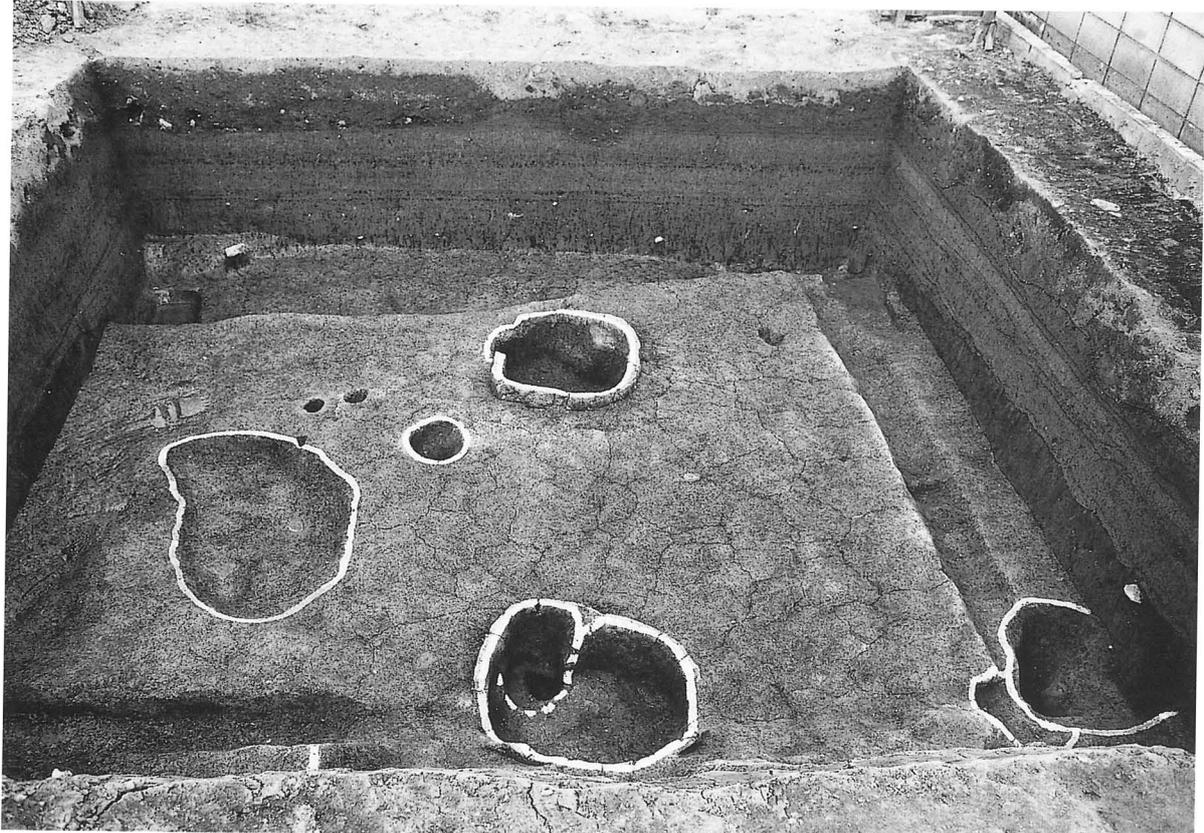
(1) 杯蓋 (SD 3 出土・第 9 図 2)



(2) 杯身 (SP39 出土・第 9 図 3)



(1) 調査区西半部 (北から)



(2) 調査区東半部 (西から)